
魔法戦記リリカルなのはWarriorS

銀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法戦記リリカルなのはWarriors

【Nコード】

N4376Y

【作者名】

銀

【あらすじ】

JS事件から約2年後――
未知なる敵と、狙われた7つのロストログア。
立ち向かう為再結成された機動六課に、新メンバーが加わる！

ラブコメも含んだバトルアクション！

魔法戦記リリカルなのはWarriors、はじまります。

登場人物紹介

名前：シルヴァス・アルビレオ

性別：男

近代ベルカ式

魔導師ランク：総合AA+（リミッター付き。本当はS）

魔力光：銀色

階級：三等空佐

役職：機動六課「ウインド分隊」隊長

決め台詞：「派手に行くぜ！」

イメージCV：関俊彦

21歳。銀髪、翠眼の青年。主人公の1人。

性格は快活明朗なお調子者。昔ある事から「銀色の鬼神」の異名を持ち、本気でキレると「修羅モード」と呼ばれる精神状態になる。プリンとコーヒーが好物で辛い物が嫌い。よく貧乏くじを引く。

シルフとは少年時代からの相棒。

戦いが好きなバトルマニアで、フェイトやシグナムと波長が合う。但し、隊長格という立場や実力の高さから全線に中々出させて貰えず、いつも見てるだけで出番が無い。

使用デバイスは双剣型アームドデバイス「ホワイトゲイル」、ユニゾンデバイス「シルフ」。

「風」の魔力変換資質の持ち主。

ホワイトゲイル

シルヴァス・アルビレオの使用するアームドデバイス。

待機形態は指輪。

「ソードフォーム」

通常形態。双剣型。

羽根を形取った細身の剣。シルヴァスは風を纏わせて斬り味を上げている。

「ストームフォーム」

フォームツヴァイ。片手剣型。

双剣を1つに纏めた形。刃は二重になっている。

「ビアンコフォーム」

フルドライブ。片手剣型。

ストームフォームと違い、完全に一体となっている。

シルヴァスの使用魔法

「スクリューバスター」

砲撃魔法。エンドレスブラストより威力は低いが、ビルの壁を十分に吹き飛ばせる。命中率は低い。

使い勝手がよく、片方の剣から放てる。

「エンドレスブラスト」

砲撃魔法。シルヴァス最強の魔法で、風で全てを吹き飛ばす。

フルドライブ専用。

「スパイラルスラッシュ」

魔力付与攻撃。風を纏った斬撃で一刀両断する。

フォームツヴァイ、フルドライブ専用。

掛け声は「旋風一刀！」

「テンペストスラッシュ」

魔力付与攻撃。風を纏った斬撃。相手を×の字に斬り裂く。

通常形態専用。

掛け声は「烈風双斬！」

「サイクロンエッジ」

射撃魔法。鋭い斬り味を持つ風の斬撃波。

「ハリケーンプリズン」

捕獲系魔法。敵の周りに風の結界を張る。

無理に動けば体を真空波で斬られる。

名前：シルフ

性別：男

近代ベルカ式

魔導師ランク：総合A+

魔力光：銀色

階級：空曹長

役職：機動六課「ウィンド分隊」隊長補佐官

イメージCV：朴口美

古代ベルカのオリジナルのユニゾンデバイス。翡翠髪、黄緑眼の少年。

シルヴァスとユニゾンする。二つ名は「銀風の精霊」。

なお、戦闘時にはシルヴァスに出番が無く、あっても1人で暴れまくるので、一番出番が無い人。

外見、精神年齢は9歳程度。

性格は勝ち気で「チビ」と呼ばれると激怒。饅頭が好物。

シルヴァスの公私のサポートをしている苦勞人。

リンとアギトによる女難なのでエリオ（こちらはキャロとルーテシアによる）と仲がいい。

風の魔力変換資質の持ち主。デバイスは持っていない。

因みに魔法体系が近代ベルカ式なのは、本人曰く「シルヴァスに合わせた結果、こっちの方に慣れた」とのこと。

シルフの使用魔法

「ウィンドカッター」

射撃魔法。片腕を振り切り、風の刃を放つ。

「クロスカッター」

射撃魔法。ウィンドカッターの両手版。

名前：ソラト・レイグラント

性別：男

近代ベルカ式

魔導師ランク：陸戦A A

魔力光：青緑

階級：陸曹

役職：機動六課「ウィンド分隊」ガードウィング

決め台詞：「鎮魂歌は歌い終わりましたか？」
レクイエム

イメージCV：福山潤

18歳。金髪、蒼眼の少年。主人公の1人。

性格は誠実で礼儀正しいので女性から人気が高い。弟属性の持ち主。スバルの幼馴染兼恋人で昔の出来事より、スバル一筋^{バカ}である。ナカジマ家とは昔から家族ぐるみの付き合い。

6年前にスバルを救えず、その上スバル^{ライバル}からなのはに救われたことを聞かされた為、一方的になのはを好敵手視している。

使用デバイスは大剣型アームデバイス「セラフイム」

セラフイム

ソラト・レイグラントの使用するアームデバイス。

待機形態は緑色の宝石。

「ブレイドフォルム」

通常形態。大剣型。

ソラトの身の丈程の大きさを持つ。

「ウイングフォルム」

フォルムツヴァイ。刀身や鐔から噴出口が出て、ホバー機能が付く。足に自動浮遊魔法が付き、地上から1mまで浮ける。滑るように移

動するので速さはマツハキヤリバー並。

「セイクリッドフォルム」

フルドライブ。両刃剣型。

刀身が柄の部分で真つ二つに割れる。

背中に8枚の魔力の羽型の自動飛行魔法を付与させる。

空域制限は無いが、速度はフォルムツヴァイより遅い。

ソラトの使用魔法

「デイバインバスター」

砲撃魔法。魔力スフィアを斬って放つ。

なのはのデイバインバスターを自己流に習得。ソラト版は斬撃波タイプになっている。

掛け声は「閃空裂波！」

「セブンスヘブン」

砲撃魔法。ソラトの最強魔法。7本の砲撃を放つ。集束、拡散両方使用可能。

「ホーリーレイド」

移動魔法。移動距離は短いが瞬間的に相手の懐に入る強襲用の魔法。そこから斬りつけるのが普通だが、グランドクロスに繋げることもある。

「アセンションランス」

射撃魔法。相手の頭上から何十本もの小さな魔力槍を落とす。殺傷能力設定なら貫通も可。

「グランドクロス」

魔力付与攻撃。十字に斬り裂く技。

1撃目を防いでも、隙が出来る為2撃目は必ず当たる。

名前：ジャック・デュアリス

性別：男

古代ベルカ式

魔導師ランク：総合A A +（リミッター付き。本当はA A A +）

魔力光：朱色

階級：一等空尉（実質的な発言力は三提督並）

役職：機動六課「ウインド分隊」副隊長

決め台詞：「遊んであげるよ、小僧（小娘）」

イメージCV：佐藤利奈

外見年齢10歳の茶髪、橙眼の少年。性格はお気楽で掴み所が無い。実際の年齢は不明（本人曰く「数えてない」）。ロストログア「エターナル」で不老不死になった。但し、歳を取らなくなっただけで心臓を刺されたら死ぬらしい。

もう既に1000年以上は生きているらしい。通称「シヨタジジイ」。

本人は不老不死を憎み「呪い」と称する反面、子供の姿を利用してセクハラや悪戯をする。

魔力だけは凄まじく、経験も豊富でトリッキーな戦法が特徴。肉体が成長していないので体力不足が弱点。

管理局内では顔が広く、三佐以上なら殆ど知っている。

はやてとリインとは、六課再結束以前に同じ事件に当たって以来知り合いに。

同じ境遇のヴォルケンリッター、特にヴィータを気に掛けている。

使用デバイスはチャクラム型アームデバイス「ヴァーミリオン」。

「炎熱」の魔力変換資質の持ち主。

ヴァーミリオン

ジャック・デュアリスの使用するアームデバイス。

待機形態は朱色のコイン。

「リングフォルム」

通常形態。チャクラム型。

周囲に8本の刺が生えている。

「サーベルフォーム」

フォームツヴァイ。チャクラム+剣型
棘の1本が伸びる。

「ツインフォーム」

フルドライブ。チャクラム型。

チャクラムが2つに増える。

ジャックの使用魔法

「レッドショット」

射撃魔法。棘の先端から炎の小さな弾丸を連射する。

デバイスを起動してなくとも、指先から放つ事も可能。

「ロツソカッター」

魔力付与攻撃。炎を纏ったチャクラムを相手に投げる。

万が一避けてもブーメランのように戻ってくる。

通常形態、フルドライブ専用。

「スカーレットブレイズ」

魔力付与攻撃。炎を纏った刃で相手を直接斬る。

フォームツヴァイ専用。

「クリムゾンカオス」

魔力付与攻撃。ジャックの最強魔法。

自分の周囲を炎で包み、4本の巨大な火柱を出す。火柱は動かすことも出来る。

「ブラッシュワールド」

結界魔法。炎で自分達の周囲を包む。

熱により、相手の体力を余計に奪う。

「シナバーフレイム」

射撃魔法。大きな火球を相手に放つ。

「カーマインサラマンダー」

魔力付与攻撃。炎で出来た龍を拳に纏い、パンチを放つ。

「マゼンタドラグーン」

魔力付与攻撃。炎で出来た龍を脚に纏い、キックを放つ。

「ガーネットバーン」

魔力付与攻撃。相手にヴァーミリオンを刺し、そこから魔力を注ぐ。その後、魔力を一気に炎に変え相手を一瞬で灰にする技。

ジャックはえげつないからと言う理由でこの魔法を封印している。

名前：エドワード・クラウン

性別：男

ミッドチルダ式

魔導師ランク：陸戦AA+

魔力光：藍色

階級：三等陸尉

役職：機動六課「ウィンド分隊」センターガード

決め台詞：「……撃ち墜とす」

イメージCV：野島健児

19歳。黒髪、藍眼の青年。性格は寡黙でクールだが面倒見がよく、皆のいい兄貴分。

ギンガと恋人同士。妹のスバルや、その恋人のソラト、更に元ナンバーズ達からも慕われている。通称「エド（兄）」。

ヴァイスとは射撃タイプ同士仲がいい。肉が好物で水に濡れることを嫌う。

女装をするとギンガすら見抜けない程の美人と化す。本人にとっては黒歴史である。

実は10歳以前の記憶が無い。本人はその事について気に掛けているものの、今のギンガ達との日常や思い出が大切だと思っている。

使用デバイスはライフル型インテリジェントデバイス「ブレイブアサルト」

ブレイブアサルト

エドワード・クラウンの使用するインテリジェントデバイス。性格は真面目だが皮肉屋。

待機形態は腕輪。

「シユートフォーム」

通常形態。ライフル型。

「ショットフォーム」

モード2。片手銃型。

シユーティングアーツとの組み合わせで、ガンⅡカタのような近接戦闘も可能。

「バーストフォーム」

フルドライブ。バズーカ型

脇に抱えるタイプで、重量がある為身動きがあまり取れない。

エドワードの使用魔法

「フォルテバースト」

射撃魔法。移動しながら撃てるが少し溜める。

「テラフレイムブレイカー」

砲撃魔法。溜めて使用するので威力は高い。但し、エドワードの魔力では3発しか撃てない。

「ネットバレット」

捕獲魔法。当たれば、全身を網のようなバインドで縛る魔力弾を撃つ。

「ブラスタースマッシュ」

射撃魔法。まず相手に円錐状の魔力ポインター弾を撃つ。

そしてポインター目掛けて飛び蹴りをし、魔力弾と共にドリルの様に相手を貫く。

モード2専用。

「エリアデストロイヤー」

砲撃魔法。エドワードの最強魔法。威力は高いが、周りを巻き込む恐れがある。
フルドライブ専用。

第1話 再集結と新たなる風

人気の無い夜道——男は走っていた。

表情は暗くとも分かる程怯え切っており、両腕にはアタツシュケースを抱き抱えている。

息を切らし、走る足が遅くなっていく。

「ぜえ、ぜえ、ぜえ……」

体力に限界が訪れ、遂に男が止まってしまった。

「おい」

不意に男の前にもう1人、少年が現れた。

「ひい!？」

「それを寄越せ。そうすれば、命だけは見逃してやる」

少年が指し示すのは、男の抱えるアタツシュケース。

「い、嫌だ……これで俺は金持ちになったんだ! 渡すものか!」

男は少年から逃げ出そうとした、が何かに阻まれた。
見えない何かに。

「……仕方ねえ、殺せ」

「ひ、ひい!？」

グシャッ!

悲鳴もない。

男は見えない何か……しかしそれは確実に存在した物に、絞められる様に潰された。

電灯も無い路地裏に、月明かりが差す。写るのは碧色の髪。

気が付くと、男の死体は何処にもなく、微かに血の跡が残っているのみ。

碧色の髪の少年は地面に転がる、血で染まったアタッシュケースを開ける。

中身の宝石の様な像を確認すると、満足そうに手に取った。

「後5つか……」

この像を巡り、戦士達は戦いを繰り広げる事になる。

JS事件から約2年後――

その功績から、機動六課は正式な部隊として再結成される事になりました。

2年前と同じ場所、同じメンバー。そして加わる新しいメンバー。

しかし、この時殆どの人が気付きませんでした。

既に大きな事件に巻き込まれている事に。

そして、これから起こる長く辛い戦いに……。

魔法戦記リリカルなのはWarriors、はじまります。

（語り手：スバル・ナカジマ）

魔法戦記リリカルなのはWarriors

第1話 再結集と新たな風

「ふわぁぁ……」

大きな欠伸を1つ。時刻は朝7時。

今日は機動六課再発足の初日にして挨拶の日。

「おいおい、シャキツとしろよ」

廊下を歩く男性を少年の声が注意する。

だがその声の主は、少年というよりは「妖精」と呼ぶ方が似合っている程のサイズで、男性のそばを宙に浮いている。

「わぁーってるよ」

男性は軽く返事をする。

銀色の髪を揺らし、ある一室を目指していた。

そこに2人、黒髪の無愛想な青年と金髪の優しい印象を受ける少年が擦れ違った。

「ここが六課の隊舎かぁ。やっぱり103部隊のと似てるね」

「見学より、あいつに会う方が先なんじゃないか？」

「勿論！」

無邪気な笑みを浮かべる少年を、青年は小さく微笑んで見ていた。そして、一瞬擦れ違った男の方に目をやる。

『今の……ユニゾンデバイスか？』

「エド兄？」

「…いや、何でもない」

エド兄、と呼ばれた青年は表情を変えず少年に返事をした。

一方、食堂では初期フォワードメンバー4人が再開を祝していた。

「ティア本当に久しぶり〜」

「分かったからひつつかないの！」

長年のペアだったスバル・ナカジマとティアナ・ランスターは、六課の一時解散時に別々の道を歩んでいた。

なので、連絡こそ取り合っていたものの会ったのは1年ぶりだった。

「お2人共お変わりないですね」

「そっというエリオは背伸びたんじゃないの〜？」

「キャラも髪延ばしたんだ」

「はい！って私も背、伸びたと思うんですけど〜！」

エリオ・モンディアルとキャラ・ル・ルシエは2人一緒に以前キャラのいた自然保護隊に身を置いていた。

キャラは前まで同じくらいだったエリオとの身長差が、段々伸びてきているのを少し気にしているようだ。

ふと、ティアナがある話題を切り出す。

「そういえば、新しいフォワード分隊が出来るって聞いたけど」

そう、正式に設立された六課には新しいメンバーが加えられる。その中には新たなフォワード4人がいるらしい。

「どんな人が来るんだろう？」

「あの〜……」

新メンバーを想像していると、後ろから声を掛けられた。

「道が分からなくなってしまって、教えてもらいたいんですが……」

そこには、見た目10歳前後の少年が立っていた。

制服を着ている所を見ると、この少年も局員なのだろう。

「いいけど、何処行くの？」

「八神って人がいる所です」

「八神って事は部隊長の部屋ね。待ってて」

ティアナは部隊長室への簡単な地図を描き、少年に渡した。

「ありがとうございます！」

少年は満面の笑みを浮かべ、走って行った。

「誰だったんだろう？」

「ロングアーチの新人でしょうか？」

その部隊長室では、部屋の主である八神はやて、その補佐でありユニゾンデバイスのリインフォース？。

そしてスターズ分隊長、高町なのはとライトニング分隊長、フェイト・T・ハラオウンが顔を揃えていた。

「でもビックリしたよ、はやてちゃん」

「急に再結成だなんて」

六課の結集。それは今から丁度1年前の解散時に決定した事だった。その理由を知っている者は、現在この場にいる4人と八神家の面々、聖王教会の騎士であり六課後見人のカリム・グラシア、同じく六課後見人の伝説の三提督のみ。

「でも、ちゃんと全員集められたし……」

と、話している途中でブザーが鳴り響く。

モニターを開くと、銀髪の男性が立っていた。

「どうぞ」

「失礼します」

ドアが開き、男性が入って来た。
更にその頭の横をライン程の小さな少年が飛んでいる。

「本日より機動六課に配属となりました。ウインド分隊長、シルヴァス・アルビレオ三等空佐です。よろしく願います」

「同じくウインド分隊長補佐、シルフ空曹長です」

自己紹介をし、敬礼するシルヴァスとシルフ。

2人とは初対面のなのはとフェイトは、シルヴァスに真面目な青年という印象を受けた。

しかし、彼を知ってるはやとラインはただ笑いを堪えている。

「ぶくく……シルヴァス君、堅苦しいのはそれくらいにしてや。似合わないよ」

「……それもそうだな。はやとラインに……高町なのはとフェイト・T・ハラオウンだっけ？」

「えっ？あ、はい」

急に砕けた態度をとるシルヴァスに驚くのはとフェイト。

「俺の事は好きに呼んでくれ。しかしこんな美人2人と仕事出来るなんてついてるな」

「シルヴァス君？私等は？」

「そうです！」

「あいだだだだ！？」

「痛っ！？何で俺まで!？」

はやてはジト目でシルヴァスの耳を引っ張り、リインはシルフをポカポカと殴る。

一転してコミカルな雰囲気、なのはとフェイトは思わず吹き出してしまった。

「スターズ分隊長、高町なのはです」

「ライティング分隊長、フェイト・T・ハラオウンです。よろしくね」

「おう！こちらこそ……いであ！いつまで引っ張ってんだ！」

「何処にいるんだろう？」

「連絡してみればいいだろう」

「ダメだよ！内緒にしてるんだから」

金髪の少年と黒髪の青年は隊舎内を歩き回っていた。どうやら誰かを探しているようだ。

「きつと驚くよ！その為にギン姉にも内緒にしてって言って……！」

食堂に差し掛かったところで、少年は目を見開いた。

「へへ、そうなん……！？」

少年の視線の先、青髪の少女もこちらに気付いた。

「スバル……！！」

「そ、ソラト！？どうしてここに！？」

青髪の少女、スバル・ナカジマに駆け寄る少年。
顔の綻びようは、まるで長年会っていない恋人に会えたかのような
った。

「今日から僕も六課に配属になったんだ！エド兄も一緒だよ！」
「そうなの！？」

後ろを見ると、黒髪の青年がゆっくり歩いてきた。

「じゃあ一緒なんだ！嬉しい〜！」

スバルは笑顔でソラトに抱き付く。

この熱烈な光景に、さっきまで会話をしていた他のフォワード3人
は呆然としていた。

「えーと……誰？」

「騒がしくて済まない。ソラト、スバル、それ位にしておけ」

「「あ……ゴメン」」

頬を染めながら離れる2人。

余談だが、突如飛来した激甘空間に、食堂にいた独身の局員達は大
ダメージを受けたとか。

「改めまして……機動六課ウィンド分隊所属となりました、ソラト・
レイグラントです」

「同じく、エドワード・クラウン」

ソラト達は自己紹介を済ませると、キャロが気になっていた事を口

にした。

「ソラトさんとスバルさんってどういう関係なんですか？」

「恋人同士だよ」

さらっと答えるソラト。

「そ、そうなんですか!？」

「うん。ほらっ」

スバルがエリオとキャロに色々な写真を見せる。

幼い時の写真、初デートの写真……中には姉のギンガやエドワードが映っている物もあった。

相方のティアナは前から散々話を聞かされていたようで、ウンザリしていたようだが。

「ティアナさん、ですね。スバルから話は聞いています」

「ティアナでいいわ。貴方の話も散々聞かされたわよ」

「あはは……よろしく」

ソラトは苦笑しながらティアナと握手した。

スバルの強引な所に手を焼いてるんだなあと思いつつながら。

ピーッ!!ピーッ!!

突然のアラートに、和やかなムードだった職場内が騒然とする。

「な、なんや!？」

はやてが確認すると、信じがたい光景が映し出された。

都市部の建物が火に包まれている。

その中心では馬とも人とも取れる怪物が暴れていた。

「こ、これって……」

「そうや。六課新設の最大の理由、獣人や」

真剣な表情になるのは達。

「説明は後だ。まずはアレを何とかしなきゃな」

そこへ待つてましたと言わんばかりに話を割るシルヴァス。
隣ではシルフが頭を抱えていた。

「そうやな、ここは……」

「俺が行こう。なのはとフェイトにも俺の実力見せたいしな」

またもやはやての話を切り、最早行く気満々のシルヴァス。
はやてとシルフは諦めの溜息を吐いた。

「後で始末書たっぷりやで？早めに頼むな」

「っしや！行くぜ！」

はやての許可を得た瞬間、走って行ってしまった。

一部始終を見ていたなのはとフェイトはポカーンとしている。

「なのはちゃん、フェイトちゃん。シルヴァス君はな……」

現場では未だに怪物が暴れている。

どうやら破壊本能だけで動いているらしい。

怪我人はいないのは幸いだった。

その場に1台のバイクがやって来た。シルヴァスだ。

「よお、随分暴れてんじゃねえか」

不適な笑みを浮かべる。対する獣人はまるで意味が分かってない。

「俺も混ぜろよ。セットアップ！」

シルヴァスは右手を突き出し、大げさに引いて叫んだ。

「Stand by」

すると右中指の指輪が反応し、銀色の帯状魔法陣に体を包まれる。

「バトルマニア？」

はやてが言ったシルヴァスの特徴になのはが首を傾げる。
一方フェイトは思う節があるのか顔を背けていた。

「戦う事が好きなんや」

「シグナムみたいな感じです」

リインの的を射た例えになのはは納得した。

炸裂するかのように魔法陣が弾け、中から白の騎士服に灰色のマントを身に纏い、両手に細身の剣を握ったシルヴァスが現れた。

「へへっ！さあ、派手に行くぜ！」

シルヴァスは獣人に恐るべきスピードで近付き、2本の剣で滅多斬りにしていく。

「グガアアアアアア！」

獣人は苦痛のあまり咆哮し、反撃しようと殴りかかる。

「遅えよ」

が、あっさり避けられてしまい、一撃で吹き飛ばされてしまう。

「オラどうした？ヒヒーンとか鳴いてみるよ！」

力量の差が違いすぎる。

しかし獣人は本能のままにシルヴァスに襲い掛かった。

「うそっ、あの速さ……フェイトちゃんみたい」

モニターでシルヴァスの戦いぶりを見ていたなのはが呟く。

「シルヴァス君はな、風の魔力変換資質の持ち主だな」

「つまり、フェイトちゃんが電気を纏って動けると同様に、シルヴァスさんも風を纏えるんです」

はやてとリインの補足説明にシルフが頷く。

「加えて、剣での攻撃を風でより鋭くする事も出来るんだ。それがアイツの得意魔法……」

「決めるぜ」

シルヴァスが深く息を吐くと、足元に銀色に輝くベル力式の特徴である三角形の魔法陣が現れる。

〔T e m p e s t s l a s h〕

シルヴァスの双剣、アームドデバイス「ホワイトゲイル」の発音と共に、2つの刃に風が渦を巻く。

「烈風双斬!!」

魔法陣が輝きを増し、共鳴するかのように剣に纏った風も光りだす。その場には強い風が吹き、爆発で起こった炎が消えて、付近の風車が回りだす。

「テンペストスラッシュ!!!」

一陣の風が馬の獣人に吹いた。

シルヴァスは双剣で勢い良く獣人を斬り裂く。

×の字の斬り跡を残し、獣人は爆発した。

「これが、シルヴァス・アルビレオ……」

未知の敵、獣人相手にも力を奮う彼に頼もしく思える隊長陣。

その中でもフェイトは、違う思いも抱きながらモニターを見ていた。

彼と戦いたいという、思いを。

第1話 再集結と新たなる風（後書き）

次回予告

なのは「遂に始動した新生機動六課。そして告げられる新たな敵とその狙い」

フェイト「シルヴァスの強さを見た私とシグナムは、それぞれ戦いを挑む。久々の真剣勝負！」

シルヴァス「次回、魔法戦記リリカルなのはWarriors 第2話 派手に行くぜ！」

シルヴァス「怪我はないかい、お嬢さん？」

第2話 派手に行くぜ！

JS事件から約2年後――

その功績から、機動六課は正式な部隊として再結成される事になりました。

初日から起こる、謎の怪物による都市部襲撃。

阻止したのは新しい仲間。その圧倒的な力は、これからの戦いの幕開けに相応しい程だった。

魔法戦記リリカルなのはWarriors、はじまります。

（語り手：フェイト・T・ハラオウン）

魔法戦記リリカルなのはWarriors

第2話 派手に行くぜ！

アクシデントがあったものの、何とか再始動した機動六課。

その翌日。

フォワード達にとって懐かしい訓練場で、隊長達から今回の事件の「敵」と「その目的」について話された。

「実は、ミッドチルダ以外でも事件が起こっているの」

なのはから告げられた衝撃の事実。

昨日と同じような化け物が別の世界でも暴れているというのだ。

「敵の名は獣人。名の通り獣の人」

「奴等は人工的に生み出された怪物らしいんだけど……」

「まだ詳しい事が分からない未知の存在だ」

人工的に生み出された。

このフリーズに反応したのは、戦闘機人であるスバルと、人造魔導師のエリオ。

未だに違法な実験で命を弄ぶ真似をする人間がいる事に憤りを感じているのだった。

「敵の目的は、これ」

ウィンドウに映し出されたのは、動物を模したかの様な像。

「S級ロストロギア、セブン・シンズ」

「全部で7つ確認されているんだけど……」

「形も小さい像って事以外一切不明」

「拳げ句1つ1つで形が違う」

敵も詳細不明なら、目的の物も詳細不明。

しかし、事件は確かに起きている。

「今まで以上に困難な事件になると思うから、気を引き締めて行こうね！」

「……はい!!」「……」

続いて改めて新メンバーの紹介が行われた。

「じゃあまず隊長から」

「おう！」

元氣良く前に出て来たのは、昨日獣人と戦い注目を攫った男。

「ウインド分隊隊長、シルヴァス・アルビレオだ！階級は三等空佐！好きな物は戦いとプリン！嫌いな物は殺しと辛い物！以上！」

小学生の自己紹介か。

この時、心の中で突っ込んだ者は少なくない。

「因みに彼女募し」

「ウインド分隊隊長補佐、シルフ空曹長だ！よろしくな！」

いい加減鬱陶しく思ったのか、シルヴァスの言葉を遮ってシルフが紹介を始めた。

「おいシルフ！まだ俺が」

「何か質問はあるか？」

どうしても喋らせたくないようだ。

すると、後ろから手が挙がった。

「ん？じゃあ黒髪の」

「エドワード・クラウンです。階級は三等陸尉」

手を挙げた男、エドワードはじっとシルフを見ている。

「曹長は、ユニゾンデバイスですね？」

ユニゾンデバイス。

古代ベルカの技術で製造された、使用者と融合する事で能力を高めるデバイスだ。

しかし、相性等の様々な問題点から汎用性が低く、希少な存在とされている。

六課ではリインフォース？とアギトがユニゾンデバイスに当たる。

「ああ。それもオリジナルだ」

「！」

つまりシルフは古代ベルカで作られたという事になる。

「あたしと同じ……」

アギトもオリジナルだが、過去の記憶を失い、何処かの研究所で違法な実験を行われていた。

「じゃあお前には昔の記憶が」

「無い！」

シルヴァス除く全員がコケた。

「ねえのかよ！」

「仕方ないだろ、俺だって……」

シルフはシルヴァスを不安そうな眼差しで見た。

「無いもんは無い！以上だ！」

が、すぐに元気を取り戻した。

「次は僕だね」

次は、見た目10歳程度の少年が前に出た。

「こほん。ジャック・デュアリス。ウィンド分隊副隊長だよ。階級は……ああ、一等空尉だっけ。まあよろしく」

可愛らしくウインクするジャック。

しかしどう考えても適当な自己紹介である。

「あの時の子供だよ？」

「嘘、あの若さで一等空尉って……」

「上司だったんですね……」

早速フォワード達はジャックを見て啞然とする。

「おいおい、こんなガキが副隊長？勤まんのかよ？」

イマイチ納得が出来ないのは、スターズ分隊副隊長のヴィータ。背丈はジャックと変わり無いが、歴戦の騎士である。

「君だってガキじゃないか」

「んだと！？このチビ！」

対するジャックは笑顔で返した。

イライラするヴィータを、今度はジッと見つめる。

「……な、何だよ!？」

「あ、勝った」

「っ!！」

どうやら背比べをしていたようだ。

「君の方がチビだったね。まあそんなに落ち込まないですよ」
「……ぶっ飛ばす!」

羞恥で顔が真っ赤になったヴィータはジャックに殴りかかったが、ヒョイと避けられてしまう。

「あれれ? さっきまでガキ扱いしていた子に殴りかかるなんて、大人気ないぞ?」

「黙れ!」

完全に手玉に取られてる。

「落ち着けヴィータ」

「離せシグナム! アイツに礼儀つて奴を」

「教わりたいのかい? いいよ、オールナイトで付き合っよ」

「うがあああああ!！」

ダメだコイツ等、早く何とかしないと。

「ジャックさん、そろそろ種明かししてください。ヴィータも落ち着いて、話聞いてな?」

「はやて……分かったよ」

「はいはい、ゴメンね」

モニターで見ていたはやてがやっと仲裁に入る。

「じゃあ改めて。僕は不老不死で、年は……1000から先は覚えてないや。好きな女性のタイプは……」

「ちよつと待ったー!!」

サラツと凄いを流したので慌てて引き止める。

「今、不老不死って……」

「そ。ロストログア「エターナル」によって肉体の成長を止められた、真正正銘の不老不死」

「エターナル」の名はエリオとキャロでも聞いた事があった。

触れた物に特殊な魔力をリンクさせる事で、肉体の「時間」を止めるS級ロストログア。

お伽話的な感じで教科書に載せられていた物だが、実在するとは誰も思っただけならいい。

「まあ、それは1000年前から僕が所有していたからなんだけだね」

実物は現在、管理局でも知らぬ者にしか辿り着けない場所に保管されている。

「つまり、僕からすれば君等は子供な訳。ま、仲良くしようね」

とんでもない人物が入ってしまい、一気に脱力してしまうフォロー

ド陣。

なのはやフェイトすら、昨日まで聞かされていなかったのだ。

「あはは……次は」

金髪青眼の少年が前に立つ。

今度はフォワード、特にスバルが知っている人物だった。

「ウィンド分隊、コールナンバー03。ソラト・レイグラント陸曹です！よろしく願います！」

隊長、副隊長と違い真面目な自己紹介に拍手が巻き起こる。

「ソラトー！」

思わずスバルが声援を出す。

ソラトは照れながら手を振った。

この時、周囲及びモニターでチラ見していた独り身の人物達は精神的に大ダメージを負ったとか。

「宣言します」

再び真面目な顔をしたソラトは、今度はなのはを見て言った。

「なのはさん……僕は貴方を何時か必ず超える！」

「え、ええっ!？」

いきなり好敵手のような宣言を受け戸惑うのはだった。全員分の自己紹介を終え、通常通りの鍛練が開始された。

但し、なのははソラトの発言に悩んでいるようだったが。

「さーて、書類と格闘だー」

「サボんなよ」

シルヴァスはシルフ監視の下デスクワークのようだが、しかし、シルヴァスを引き止める人物達がいた。

「待って！」

「ん？」

ライトニング分隊の隊長と副隊長、フェイトとシグナムだ。

「どうした？デートのお誘いなら1人ず」

「違う」

あっさりシグナムにバツサリ斬られガツクリと落ち込む。

「シルヴァス……私達と戦って欲しいの」

「！？」

フェイト達は、なんとシルヴァスに模擬戦の申し込みをしに来たのだ。

シルフは目が点になり、当の本人は俯いたままピクツと反応した。

「昨日の剣捌き、感服した」

「貴方の実力もこの手で確かめたいし」

要するに、アンタ等もバトルマニアか。そう考え、シルフは深く溜息を吐いた。

そして申し込まれた当人は

「……ま、こんな美女達に誘われちゃあ断る訳にもいかねえよな！」

見事に復活していた。

模擬戦当日。

いつもの訓練場にてシグナムとシルヴァスが対峙していた。
部隊長であるはやてにも許可を取り、フォワード達も訓練の一環として見学する事に。

「なのはさんやヴィータ副隊長はいいんですか？」

「アイツ等バトルマニアで勝手にやるからいいんだよ」

「あはは……」

隊長、副隊長共に好きで戦うような趣味がないのでスターズは欠席。
ジャックも興味無いとの事。

「まずはシグナム副隊長かい」

「ああ。手加減無しで頼む」

勿論2人共ユニゾンデバイスは使わない。

「それじゃ、用意はいい？」

審判はなのはが担当。相手を昏倒、若しくは降参させた方が勝ちである。

「ああ！派手に行くぜ！！」

「何時でも構わない」

派手にポーズを決めるシルヴァスと、対照的に冷静なシグナム。

「じゃ、開始！」

なのはの合図でシグナルが鳴り、戦闘が開始された。

「行くぜ行くぜ行くぜえー！！！」

早速、高スピードでシグナムとの間合いを詰めるシルヴァス。
シグナムはそれを見切っていたかのように剣を構える。

「真っ向から攻めるだけが」

「剣術じゃないってんだろ？」

速い。

シグナムはカウンターを決めたはずが、逆に後ろに回り込まれていた。

「だが！」

伊達にかつてフェイトと模擬戦を繰り返した訳ではない。
素早く振り向き、シルヴァスの剣を払う。

「はああああ！！！」

「うおっ！？」

残った右の剣で受け止めるが、弾き飛ばされる。
シグナムの気迫に驚くが、すぐに子供のような笑顔に変わる。

「そう来なきや面白くねえよな!!」

戦場に風が吹き荒れる。

まるでシルヴァスを中心に竜巻が起こっているかのように。

「面白い男だ……!」

対するシグナムもレヴァンティンに紫の炎を纏わせる。

シルヴァスの強風に揺られ、炎は勢いを増す。

「烈風双斬!!テンペストスラッシュ!!」

「紫電一閃!!」

銀色の風を纏った双剣と、紫の炎を纏った剣が激突した。

余波で瓦礫が砕け、火の粉が飛び散る。

その時、シルヴァスが巻き起こした風にシグナムの炎が燃え移り、紫炎の渦となり2人を包んだ。

「シグナムさん!?シルヴァス君!？」

慌ててなのはが呼びかけるが、剣と剣がぶつかる音が聞こえるので2人はまだ安全だと分かる。

「うおおおおおおおおお!!!!」

やがて雄叫びが響き、渦の中から素早い何かが飛び出してきた。それは瓦礫を数ヶ所打ち抜き、地面に激突して止まった。

砂煙が晴れると、ボロボロになったシグナムの首筋にホワイトゲイ

ルを当てる、煤だらけのシルヴァスがいた。

「降参か？」

「……ああ、悔しいが」

勝負が決まった。

「よし、次だ」

煤を払い落とし、もう次の戦闘を始めようとする。

「ちょ！？休んだほうがいいよ！」

「だが断る。そうだろ？」

止めようとするのはを尻目に、上空で待機するフェイトに同意を
求める。

「……うつん、休んだ方が」

首を振るフェイトに、シルヴァスは一瞬で斬りかかっていた。
しかし、フェイトもバルディッシュで受け止めている。

「休憩なんて、戦場じゃ無いんだよ」

「……負けの理由にしないでね？」

「俺はそんな小さい男じゃ、ねえ！！」

空中で距離を取るシルヴァス。フェイトにも火が付いたらしい。

なのはは勝手に始められてしまい慌てていた。

「やらせてやれ、高町」

近くで休んでいるシグナムが声を掛ける。

「もう……」

スピードタイプ対スピードタイプ。

最早、戦い慣れでもしてない限り視認出来ない様な戦いが繰り広げられていた。

「凄い……」

「フェイトさんですが、シルヴァスさんも凄いです！」

フォワード達は2人の戦いぶりに感嘆していたが、ヴィータとシルフは呆れ返っていた。

「よくまあやるな……」

「いや、全く」

戦っている当人達はもう相手しか視界に入っていない。

「チッ！」

シルヴァスは接近戦主体なのに対し、フェイトは射撃魔法を交え、バランス良く戦っている。

「プラズマランサー!!」

「しまっ!？」

気付いた時には、雷の高速弾に囲まれていた。
無数の射撃を受けてしまえば、流石のシルヴァスも溜まったもので

はない。

「……勝負あ」

「待ってなのは！」

勝利宣言しようとするのはを制止するフェイト。

「勝手に終わらすな！」

シルヴァスはまだ意識を保っていた。

バリアジャケットはボロボロになっていたが、致命的なダメージは負っていなかった。

「ってて……数発食らっちゃったじゃねえか」

「数発！？あれだけあったのに！？」

シルヴァスの発言にギャラリーが驚く。

いくらなんでもあの数の殆どを避けきれる筈は無い。

「ああ。だから撃ち落とした」

避けきれないなら、初めから全て落とせばいい。

強引な理論でシルヴァスは魔力弾の回避に成功したというのだ。

「嘘……」

「誰が射撃が使えないなんて言ったよ？」

いや、そこじゃなくて。

全員が心の中で突っ込んだ。
最も、同じスピードで動けるフェイトはあまり不思議に思っていない
ようだが

「さ、続きと行こうぜ！」

シルヴァスはホワイトゲイルに再び風を纏わせる。

「特攻するなら砲撃を構えるだけだ！」

フェイトはシルヴァスの行動を先読みし、砲撃魔法を構える。
確かにフェイトの素早い砲撃なら後ろに回り込む前に落とせるだろ
う。

しかし、先程と違うのは特攻しない事と「片方の剣」のみという事。

「サイクロンエッジ!!」

シルヴァスは剣を振り、刃から風の斬撃波を放った。
そう、シルヴァスが行ったのは射撃魔法だった。

「くっ!!? プラズマスマッシュャー!!」

既に砲撃の準備をしていたフェイトは、仕方なく射撃魔法ごとシル
ヴァスを落とそうと放った。

「頂きだっ!! フォルムツヴァイ!!」

「Ok、Storm form!!」

シルヴァスは迫りくる砲撃を軽く避け、隙だらけのフェイトを背後

から襲撃した。

移動中に愛剣のホワイトゲイルは一纏めの剣と化していた。

「Spiral slash」

「旋風一刀！！！」

一纏めにされた刀身には、双剣だった時の2倍の風が渦巻いている。

「スパイラルスラッシュ！！！」

非殺傷設定とはいえ、勢いよく斬られたフェイトは地面に落ちて行った。

しかし、何時まで経っても衝突したような体の痛みは無い。
寧ろ、フワフワと浮遊感がする。

フェイトは不思議に思い、目を開く。

「よお、怪我はないかい？お嬢さん」

目の前にシルヴァスの笑顔。

この時、やっと自分がシルヴァスにお姫様抱っこされた状態だと気付いた。

「シルヴァス君の勝ちだね」

シルヴァスの後ろではなのはが笑顔で答える。

途端に女性としての羞恥心が警報を鳴らす。

「きゃあああああ！！！！」

「ちよっ！？もう勝負は終わるへっ！？」

すぐにバルディッシュを再起動、哀れシルヴァスは特大ホームランで近くの海まで吹っ飛んでしまったのだった。

第2話 派手に行くぜ！（後書き）

次回予告

なのは「新フォワードを迎えての鍛錬。皆レベルアップしてるけど、ソラトもエドワードも負けてない！」

ヴィータ「けど、ソラトはなのは相手にムキになってるようだ。一体何の因縁があるんだ？」

ソラト「次回、魔法戦記リリカルなのはWarriors 第3話 鎮魂歌は歌い終わりましたか？」

スバル「あまり、無茶しないでね？」

第3話 鎮魂歌は歌い終わりましたか？

JS事件から約2年後――

その功績から、機動六課は正式な部隊として再結成される事になりました。

明かされた六課再結集の理由と、新たな仲間達。

模擬戦で見せた隊長の圧倒的な力は、人々の注目を集めた。

そして、仲間の1人は私の大切な人。

これから過ごす時間に、期待を寄せる。

魔法戦記リリカルなのはWarriors、はじまります。

（語り手：スバル・ナカジマ）

魔法戦記リリカルなのはWarriors

第3話 鎮魂歌は歌い終わりましたか？

六課設立から1週間。

今日もフォワード陣は高町なのはとヴィータの教導を受けていた。なのはの教導を受け慣れていないソラトとエドワードはともかく、前六課フォワードの4人も何とか付いていくのがやっとだった。

「お前等だらしねえぞ！」

ヴィータからの叱咤を受けるスバル、ティアナ、エリオ、キャロ。それもそのはず、なのはは4人のレベルアップを見越して、ハードルを更に上げていたのだ。

「特にティアナ！お前体力落ちて無いか？」

「す、すみません……」

ティアナは執務官勉強の為、解散から再結成まで体を鍛え忘れていたのだった。

執務官はデスクワーク主体なので仕方無いと言えば仕方無い。

「あと3分休んだら次始めるぞ」

「……はい！」「……」

一方で、新メンバーのソラトとエドワードはなのはに呼ばれていた。

1週間、他のメンバーと同じ練習をさせたのだが、2人は付いてこられた。

最も、エドワードはいつも体力が限界間近だった。

「今日は改めて2人の実力を確かめたいの」

「……はあ」

「内容は簡単な模擬戦。2人で私と戦う事」

なのはの提案は2対1。

2人共気絶するか降参したら負け。

「勝てば今日はお休み。負ければ反省のレポート」

「はい!!」

勢い良く返事をしたのはソラトだった。
若干敵意か何かが混ざっていた気もするが。

「えと、じゃあ10時からね!」

一瞬呆気にとられたが、すぐに話を切り、時間まで教導に戻った。

「あまり張り切りすぎるな。お前の悪い癖だ」

「ゴメン……でも大丈夫!」

冷静に注意するエドワード。

だがソラトは気にしていないようだ。

10時。

邪魔にならない様に、他のフォワード達は見学している。

「ソラト、いつもと違う感じだけどどうかしたの?」

ティアナが素朴な疑問をぶつける。

「そういえば、なのはさんを見る時だけ目付きが変わっていた様な
……」

キャロも続く。

するとその答えはスバルから帰ってきた。

「実は、私の所為なの」

「「「えっ?」」」

「6年前の空港火災で、私がなのはさんに助けられた事は知ってるよね？」

3人共頷く。特にティアナはペアになってから、憧れのなのはの活躍を含め何度も聞かされた。

「それで、私がなのはさんの話をしたから、ソラトの対抗心に火が付いちちゃって……」

つまり、好きな女性を救う役目を取られて以来、好敵手視していたのだった。

「そりゃあアンタの事だから散々聞かせたんでしょね」

「あはははは……」

経験者からの鋭い指摘に笑うしかないスバルだった。

「あまり無理はするな」

「平気。エド兄はあまり手を出さないで。僕の力で勝たないと意味ない事だから」

既にセットアップを終えている2人。

ソラトは遠くのなのはを見据え、セラフィムを構えている。こうなってしまったら殆どの言葉は耳に入らない。

「こういう所はスバルに似てるな……」

「じゃあ始めよっか！」

「はい！お願いします！」

本日何度目かの溜息を吐くエドワードを差し置き、模擬戦は開始された。

「はあああああ！！」

大剣セラフィムを構え、真っ直ぐ走るソラト。

「？」

なのはは無言でソラトに射撃魔法を連続で放つ。
しかし、別方向からの鋭い射撃で阻まれた。

「俺の仕事はこれだけか」

エドワードは後ろからゆっくり追いつつ、精密射撃でソラトを援護する。

そしてソラトがなのはの近くに達し、一気に飛んできた。

「うおおおおおお！！」

これまた一直線なのはに切り掛かる。

「そんなんじゃ狙われるよ」

しかしなのはは冷静にソラト目がけて射撃魔法を撃った。

〔Holy raid〕

ソラトの口が弛む。

その瞬間ソラトの姿が消えた。

「え!?!」

〔Grand cross〕

気が付くと、ソラトはなのはの背後に回っていた。

移動魔法、ホーリーレイド。

距離は短い、瞬間移動が可能。

「グランドオオオオオオ!!」

〔Protection〕

ソラトはセラフィムを縦一線に振り下ろす。

早く気付いたなのはも、防御魔法で重い一撃を防いだ。

「隙だらけだよ」

下ろしきった大剣は返りが遅い。

「クロスウウウウウ!!!!」

ところが、なんと下ろしたセラフィムを斜め上に少し切り込んだ後、横一線に切り掛かった。

魔力付加攻撃、グランドクロス。

強力な一撃を2度放つ事で、隙を無くし確実に当てる技。

『決まった!』

ソラトは確信した。
だからこそ気付けなかった。

なのはが既に砲撃魔法の準備を終えていた事に。
剣を振る瞬間に桃色の閃光が自身を捕らえている事に。

「ソラト……！？」

空中で大きな爆発が起き、続けて小さな爆発が続いている。

「……ま、自業自得だな」

ギャラリーでヴィータが口にする。

爆煙が晴れると、無傷で飛んでいるのはとバインドで縛られボロボロになったソラトが見えた。

「ソラト！？」

スバルが叫ぶ。エリオとキャロは呆然とし、ティアナは苦笑していた。

「ぐ……」

辛うじて意識があるようだ。

なのははソラトをゆっくり下ろした後、エドワードに向き直った。

「さ、始めよつか」

「……はい」

冷や汗を掻き、ライフルを構えるエドワード。

結果は善戦したものの、威力を圧倒されて敗北となった。

その夜、ソラトはエドワードの倍の枚数のレポートを出されていた。理由は、問題点が多すぎたから。

「はあ、スバルに格好悪い所見せちゃったなあ……」

漸く冷静さを取り戻したソラトは、自身の行いに反省しつつレポートを仕上げていた。

「あの時点で砲撃魔法が撃てたって事は、僕の攻撃を予測していたんだ」

恐らく、ホーリーレイドを仕掛けた時には準備を始めていた。

「戦況を見極める能力……でも、それだけじゃない」

分析しても、何故なのはがあれほど自分に怒ったかが分からない。

「ソラト」

背後から呼ばれ振り向くと、優しい笑顔の恋人がいた。

「体、大丈夫？」

「うん。少し痛むけど大丈夫だよ」

「あまり、無茶しないでね？」

苦笑しつつ、レポートを完成させる。

「さ、終わったしご飯食べに行こっか」
「うん！」

手を繋ぎ、2人は食堂に向かおうとした。

ビーツ！ビーツ！

和やかな時間を打ち壊すかの様に鳴り響くアラート。
場所はクラナガン近くの国道。獣人の後ろで被害に合った車が炎上している。

「部長長、ここは僕が行きます！」

「私も出ます！」

「分かった。氣い付けてな！」

ソラト達がいる場所は車庫に近い。

2人はすぐにはやてに許可を貰い、現場へ向かった。

ソラトのバイクに乗って現場へ向かう。

獣人はイノシシの特徴を持ち、鋭い牙で車の運転手を襲おうとしている。

「行くよ、セラフイム！」

ソラトは懷から青緑色のクリスタルを出し、

右手を前に突き出した後、ゆっくりと腕を捻りながら左側へ移す。

「セットアップ！」

そして、発声すると同時に右手首を180°回転させる。

「Standing by」

すると、クリスタルから青緑色の帯が何本も出現しソラトを覆った。そして中から青緑色のラインが入った黒いシャツと白い半袖の上着、灰色のズボンを履いたソラトが現れた。

その手には大剣型アームデバイス、セラフィムが握られている。

隣では、スバルもバリアジャケットを装着している。

「スバルはあの人の救助を。獣人は僕がやる」

「分かった！」

倒れた人の下に走るスバル。

獣人が襲い掛かるが、庇う様にソラトが間に割って入る。

ソラトは真剣な眼差しでセラフィムの切っ先を向けた。

「鎮魂歌は歌い終わった？」

司令室では、なのはとヴィータがソラトの戦いぶりをしっかりと見ていた。

「ソラトの評価はこれ見てから決めようかな」

「そうだな」

「でも……私、ソラトに何かしたっけ？」

「あ、いや……さあな。ハハハ……」

何故自分を好敵手視しているかはまだ知らないのだが。

獣人は鼻息を荒くし、ソラトへ一直線に突進してくる。

対するソラトも、セラフィムで抑え込む。

「グオオオオオ！」

弾き返すが、イノシ獣人はすぐに突進を仕掛けてくる。
力強い図体に苦戦するソラト。

「はあああああ！」

牙を剣で押さえながら、ソラトは獣人の腹を蹴り飛ばした。
突進の勢いが止み、その場を離れる事が出来た。
態勢を立て直した獣人はまたもや突進攻撃を仕掛ける。

「！」

ソラトは攻撃を受け流し、追撃を掛けようとした。
しかし、背後には救助活動しているスバルがいる。

「くっ！」

結局、先程と同じ様に牙を剣で受けとめた。
スバルがこの場を離れるまで、ソラトは防御に専念していた。

「このままじゃスバルが……！」

この時、ソラトは気付いた。
なのはと戦って負けた時、勝利に焦って自分勝手に攻め続けた。
だがあの時、後ろにはエドワードがいた。
もしあれが今の状況だったら、自分だけじゃなくエドワードも危なかった。

「あの時、自分勝手な行動を取ったから、なのはさんは……」

ソラトはやっと気付けた。

自分がまだまだ未熟だという事に。

「スバル！その人を早く安全な所に！」

「うん！」

スバルは怪我人を背負い、被害が及ばない場所へ移動した。
獣人がスバル達を追おうと、ソラトから離れる。

「行かせない！」

ソラトの鋭い一撃で、獣人の牙が切り落とされた。
痛みに悶える獣人と、スバルが行った方向の間に立つ。

「僕はまだ強くなれる……気付く事もいっぱいある……そうだ！」

ソラトの足元にベルカの魔法陣が浮かび上がる。

セラフィムがカートリッジを1発ロード。

すると、青緑の光を放ちながら魔力がソラトの前で球体を形成していく。

「いつか、なのはさんを超えて見せる！！」

〔Divine buster〕

セラフィムを右肩から背負う様に構え、魔力を高めていく。

「グオオオオオオオオ！！」

武器を失った獣人はがむしゃらに突進して来る。

「閃空烈波！！デイベインバスターアアアアア！！」

ソラトが目目の前のスフィアを大きく斬ると、巨大な斬撃波となり放たれる。

曲線状の砲撃魔法はイノシシ獣人の体を簡単に斬り裂き、爆発を起こした。

「……………」

管制室。

ソラトが気付いた事で、さっきまで満足そうに頷いていたなのはは、打って変わって目を点にしていた。

「あ、なのはちゃんには言っただけ？」

はやてが苦笑しながら呟く。

デイベインバスターは、本来なのはの得意な魔法。
それをスバルがアレンジして使っているのは知っていた。

しかし、更にソラトがアレンジを掛けて使っている事は知らなかったのだ。

「あ、あはは……」

「ありやもう別モンだな」

ヴィータのツツコミ通り、まったく別の魔法となっている。

しかし、確かにデイベインバスターの派生魔法であり、これもソラトの「なのはを超える」という心の現れ。

この後、なのははソラトに何をしてしまったのか真剣に悩む事になったのだった。

薄暗い部屋。

機械の音はするが、生物の声や物音は聞こえない。

「……………」

1人の少年がモニターを眺めていた。
映っているのはソラトの戦闘シーン。

「まだまだ強くなる……か」

椅子から立ち上がり、その場を後にする。

「貴様にはもつと強くなってもらわなくては困る」

静かな口調に反し、真っ赤な眼光が怒りに満ち溢れる。

「強くなった貴様でないと、殺す意味が無い」

第3話 鎮魂歌は歌い終わりましたか？（後書き）

次回予告

ヴィータ「新メンバーにも慣れて来たが、ジャックだけは気に食わない！」

シグナム「怒るヴィータに、主がジャックの悲しい真実を伝える。彼は我々と同じだと……？」

ジャック「次回、魔法戦記リリカルなのはWarriors 第4話 遊んであげるよ、小僧」

ジャック「これは、ただの呪いさ」

第4話 遊んであげるよ、小僧

JS事件から約2年後――

その功績から、機動六課は正式な部隊として再結成される事になった。

新たな芽は、仲間に馴染み成長を続ける。

目標に向かい、一途に突っ走りながら。

だが1人だけ、どうしても気に入らない奴がいる。
人の気を狂わして楽しんでやがる、アイツは……。

魔法戦記リリカルなのはWarriors、はじまります。

（語り手：ヴィータ）

魔法戦記リリカルなのはWarriors

第4話 遊んであげるよ、小僧

昼休み。

局員達は昼食を取ったり、仲間との談笑等で有意義な休憩時間を過ごしている。

しかし、1人だけ暇そうに歩いている少年がいた。

「何か面白そうなこと無いかな」

ジャックは昼食にホットケーキを食べ、満腹になった。たはいいがやる事が無く、時間を持て余していた。

「ん？あれは……」

ふと前を見ると、廊下を歩いているヴィータを発見する。

ジャックの退屈そうだった表情が、何かを閃いたような笑みに変わる。

一見、無邪気そうな笑顔だが、内側は邪気塗れである。

「やあ、ヴィータちゃん」

まずジャックはヴィータの後ろ側に回り込み、軽快な挨拶とともにお尻を触った。

「っ！？テメー！！」

「女の子がそんな言葉遣いじゃないよ」

「うるせえ！このセクハラ野郎！」

端から見れば子供の喧嘩だが、実は両者ともかなりの歳である。

「子供の権限って奴だよ」

「何が子供だ！今日という今日はブチのめす！」

「ああ、ごめんごめん。君の方が子供だったね。よしよし」

怒りのボルテージが上がっていくヴィータに対し、ジャックは笑顔でヴィータの頭を撫で始める。

「てんめええええええええええ！！」

今ので完璧にキレたらしい。

鬼のような形相のヴィータに流石のジャックも身を退く。

「あちゃー……からかいすぎたか。ごめんね♪」

笑顔を崩さないまま、ジャックは全速力で逃げ去った。

「つてことがあつたんだ！」

ヴィータは怒りを溜め込んだまま、部隊長室に来ていた。丁度、他のヴォルケンリッターも集結している。

「主、確かに私も疑問に思います」

「本人は楽しんでるみたいけどさ」

シグナムとアギトも苦言を呈す。

それだけジャックの魔手がのびているということだ。

これには、はやても頭を抱えていた。

「セクハラはしないよう、あれほど言っておいたのに……」

可愛らしい笑顔のエロジジイに拳を震わせる。

「大体、アイツ1000年生きてるって言うてたけど本当か？」

ヴィータの疑問はまだあった。

不老不死が真実なら、自分達より長く存在していることになる。

しかし、ジャックはどう見てもませたエロガキ。副隊長の器にも見えない。

「それは本当の話や」

しかし、はやては急に真剣な表情で話す。

「んー、なら話しといた方がええかな」

「何を？」

「あの人が辿った道を」

はやては静かに語りだした。

昔々、あるところに1人の少年がいた。

家族と幸せに暮らしていた少年は、近くの森で不思議な石を拾ってしまった。

そこから少年の運命が大きく変わった。

まず感じたのは、周囲との時間のズレ。

親しい者全てが老いて逝く中、自身は子供のまま。ついには1人、取り残されてしまった。

絶望の末、少年は死を選んだ。

しかし、戦争に巻き込まれ、結局死ねなかった。死んでいく者達を見て、更に絶望する少年。

以来、少年の中で何かが変わった。不老不死の力は自身の宿命なのだ。

ならば、それを生かし自分に出来ることをしよう。
そして、誰かを幸せにするために常に笑顔でいることを誓った……。

「ジャックさんは今まで、1人で生きてきたんや」

ジャックの痛みを、ヴォルケンリッターの面々は分かる気がした。
ジャックは間違いなく、自分達が歩んだベルカの戦乱の歴史を生きていた。

「それと、皆のことを特に気にしとったよ。似たような境遇だから
って」

子供のようなスキンスリップの取り方であったが。
流石に誰も、何も言えなくなっていた。

一方、当のジャックは道端で会った事務担当の隊員に缶コーヒーを
ご馳走していた。

因みに、この隊員はまだジャックの本性を知らない。

「先輩、お疲れ様です」

「ありがとう！でも、後輩に奢らせちゃって悪いなあ」

「気にしないで下さい」

束の間の休息。

「そういえば、ジャック君は何処所属なの？」

隊員は事務の仕事でジャックに会ったことが無かった。

「ああ、ここですよ」

ジャックは自身の隊員証をシルフィに見せた。
ゆっくり読んでいくにつれて、隊員の顔が青くなっていく。

「え……えっ！？ええええ！！？」

「つまり……君の上司だね」

自分を年下の後輩に思わせ、後で上司だとネタばらしする。

この時の相手の反応を見るのが、ジャックの楽しみの1つであった。

「え、えっと、すすすみません！？」

「いやいや」

盛大に慌てふためく隊員に、ジャックは満足したようだ。

「おい、ジャック！質の悪い悪戯してないでこっち来い！」

そこへ、ヴィータが現れた。

「おや、お呼びが掛かったから行くね。仕事、頑張つて」

「は、はい……」

驚き疲れた隊員の肩をポンッと叩き、ジャックはヴィータの元へ向かった。

「で、何の用かな？」

ニコニコ、笑顔を崩さないジャックと対照的に、ヴィータはイライラしている。

「はやてにお前の身の上話を聞いた」

「ふーん……本人の知らないところで話されるのは、あまりいい気はしないなあ」

ジャックはそれでも態度を崩さない。

「何でそんなにヘラヘラしていられるんだ？お前はアタシ達以上に辛い目にあってきたんだろ？」

「君達程じゃないよ」

途端にジャックの声が真剣味を帯びた。

「君達は作られ、生み出された時から戦ってきた。夜天の書の呪縛に捕われたままだった。君達の方が」

「それ以上言っな！」

ヴィータがジャックの胸倉を掴む。

「アタシは同情して欲しいんじゃない！別にアタシ等は今は、はやてがいてくれるからそれでいいんだ！」

「…そっか、ゴメン。今の君達は幸せそうだしね。はやてちゃんはいいい子だ」

「んなこと、皆知って……！」

ヴィータはあることに気付いた。

ジャックが、過度な悪戯やスキンシップをしながらも、自分達を見

ていたことに。

そして今、ジャックは何処か寂しげな目をしている。1000年、孤独に無理矢理生きてきたジャックには心を許した相手がいない。悪戯も気になる相手に意識して欲しいから、という正に子供みtain理由かもしれない。半分本気で楽しんでいるが。

「……お前の本心は何処にあるんだ？」

「さあね」

「それって悲しくないか？」

ヴィータにははやてがいる。他の奴にも家族や友人、恋人がいる。しかしジャックには、誰も何もいない。

「じゃあ、誰が僕の枯れた心を理解出来ると思う？」

ジャックから笑顔が消えた。

真剣な表情でヴィータを見据えている。

「この力はね、呪いと同じなんだ。世界から争いが無くなるまで、1人で見守り続けなきゃいけない。理不尽な死をもつ見たくないから……」

ジャックが見てきた光景の中には、外見が自分と変わらない子供の死もあった。

自分が生き、彼らが死ぬ。

このギャップがジャックに一番衝撃を与え、トラウマとして残り続けていた。

「それがお前の本心か」

「ああ！僕は……」

震えるジャックにヴィータは手を差し伸べる。

「やっと聞いた」

「あ……」

だが、ジャックは手を取ることを躊躇する。

「ほら！」

ヴィータがジャックの手を強引に掴んだ。

ジャックは今度は驚いた顔を見せる。

「これからはアタシがお前の本心を聞いてやる！アタシが頼らせてやる！」

「……けど、皆すぐいなくなる」

不老不死の孤独。知り合っても、皆は老衰して逝く。
ジャックのもう1つのトラウマも浮き彫りになった。

「アタシは死なねえよ」

「！」

「これでいいか？」

ヴィータの真つすぐな瞳がジャックを見つめる。
するとジャックはいつも通り、しかし影のない微笑みを見せた。

「君は強いな。僕の負けだ」

ジャックは改めて、手を握り返した。

「……けど、もうセクハラはするなよ？」

「んー、ヴィータが付き合ってくれるならいいよ」

「……は？」

ジャックは笑顔でサラリとすごいことを言い放った。

「だから、ヴィータが僕の恋人になってくれれば、セクハラはしないよ」

「は、はあああ！？」

ジャックの爆弾発言に、顔を真っ赤にするヴィータ。
今までこういった話が皆無だったので、予想外すぎたのだ。

「じよ、「冗談だよな？」」

「僕は冗談で好きとは言わない主義だよ？」

「嘘だ！」

ますます信じがたい。

しかし、どうやら嘘ではないらしい。

「今ので好きになっちゃった」

「なっちゃったって、お前！？」

「ヴィータは僕が嫌いだったけ？残念だ」

「いや、その……」

わざとらしく言うところがまた胡散臭い。

しかし、ヴィータはジャックを直視出来ないくらい気が動転していた。

「信じられないなら、キスし」

「うらあああああ!？」

ジャックが顔を近づけようとすると、殴り飛ばされた。

「ぜえ、ぜえ……」

「いたた……ゴメン。それともちゃんとした順序で告白した方がいいかな？」

「もついいから!分かったから!」

これ以上は恥ずかしさで爆発してしまいそうだとヴィータは思った。

その時、アラートが鳴り響きムードを壊した。

「クラナガン上空に獣人が現れました!」

送られた映像では、コンドルの姿をした獣人が飛行形態のロボット兵——ネオガジェット・タイプB——を数体引きつれ、クラナガンを見下ろしていた。

「おっしゃ!ここは俺が」

「ルキノちゃん、正確な場所を送って。ソラト君達は地上で市民の安全確保。僕が空で潰してくるよ」

「りよ、了解!」

シルヴァスの言葉を遮り、ジャックが素早い指示を出す。

「じゃあ俺も」

「君はお留守番。じゃ、よろしく」

一方的に通信を切り、朱色のコインを取り出す。

「帰ってくるまで、考えておいて」

「あ、ああ……」

ヴィータにそう告げると、コインを親指で弾く。

「ヴァーミリオン、セットアップ」

「Stand by, ready!」

宙を舞うコインから朱色の帯状魔法陣が現れ、ジャックを包む。中ではジャックが炎を纏うように、橙色のジャケットに茶色のハーフパンツ姿に変わる。

そしてコインがチャクラムと呼ばれる円形の武器へ変わると、ジャックは魔法陣を破り飛行魔法で現場へ直行した。

獣人はある場所を探していた。

「まったく……どの辺だ!？」

クラナガンへ来たはいいが、指示された場所が分からず苛立っていたのだ。

ついには片っ端から破壊しようとしてまで考えていた。

ヒュンッ!

一瞬、風を斬る音がした。

「へ？」

続いて、獣人の背後で爆発が連続して起こった。

「どわあああ！？な、何だ！？」

気付くと、引き連れていたネオガジェットが1機もない。
そして、前方に怪しい武器を構えた少年が飛んでいる

「折角の雰囲気を邪魔するなんてね……仕方無いから遊んであげよ、小僧」

笑顔だが、冷たい空気を放っている。

それに反して、チャクラムは朱色の炎を纏っている。

ジャックはシグナムと同様「炎熱」の魔力変換資質の持ち主であり、炎を自在に操る事が出来る。

先程は燃え盛るチャクラムを飛ばし、ブーメランのようにネオガジェットを全機撃墜させたのだ。

「何だガキヤアアア！！」

苛立っていたコンドル獣人がジャックへ真っすぐ飛んでくる。
ジャックは向かい合ったまま後ろに飛び、獣人の顔にチャクラムの刺を向けた。

〔Red shot〕

刺から小さな火の玉がマシンガンのように飛び、獣人の顔面に命中する。

「ぐぎゃああああ!？」

思わず顔を押さえると、火球の雨が止んだ。

「て、テメー……」

獣人がジャックを睨む。

しかし、ジャックは既に次の攻撃へ移っていた。

「燃える」

〔Cinnabar flame〕

巨大な火球が獣人を焼き払い、地に落とした。

「あぢいいいいい!？」

「ヴァーミリオン、フォルムツヴァイ」

〔了解です〕

熱さに悶え転がる獣人の前に、チャクラムの刺を伸ばして剣のような形となったデバイスを構えた、ジャックが降りてくる。

「もう終わりかい？」

刃に炎が灯る。

不適な笑顔のまま、獣人を剣で切り刻むジャック。逃げようと足掻くが、足で踏み付けられ動けない。

辺りには獣人の悲痛な断末魔が響いた。

「そろそろだね」

「は、はあ……」

そう言いつつ、ジャックは獣人の翼に剣を刺して、グリグリと動かしている。

マスターのサディスティックな行動に、ヴァーミリオンも呆れていた。

「行くよ」

漸く剣を抜くと距離を取り、ヴァーミリオンをコインに戻して懐にしまう。

「はあああああ……」

ジャックの足元に古代ベルカ式特有の三角形の魔法陣が現れ、三つの角から炎が吹き出す。

〔Magenta dragon〕

ジャックが高く跳び、空中前転して跳び蹴りの姿勢を整える。すると、炎で出来た龍が脚に絡み付く。

「はあああああつ!!」

龍を纏ったキックを敵目がけて放ち、何も出来なかった哀れな獣人は爆散した。

「ふう、疲れちゃった」

ヴィータの元へ戻ってきたジャックは軽く息切れをしていた。

いくら不老不死でも元は人間、しかも子供の体のまま。体力の無さがジャックの隠れた弱点であった。

最も、それを感じさせない戦い方ではあったが。

「お前なあ……」

「つい、ね」

流石のヴィータも引いていた。

舌を出して可愛らしさをアピールする推定1000歳。そしてすぐに真剣な表情に変わる。

「それで、考えてくれたかな？」

「……………」

俯くヴィータ。しかし、返事はすぐだった。

「アタシを好きになって、後悔すんなよ……」

「後悔なんて、しないよ」

ジャックはヴィータを優しく抱き締めた。

甘える子供のような顔で。

数日後。

「待ちやがれえええええ!!」

「あっはっはっ」

ヴィータにセクハラを働き、追い掛けられるジャックの姿があった。

「セクハラしねえつつただだろうが!!」

「彼女相手ならスキンシップだもん」

周囲は「ケンカする程仲が良いカップル」と称するようになったとか。

第4話 遊んであげるよ、小僧（後書き）

次回予告

スバル「市街地の調査途中、ギン姉と合流！皆はエド兄との関係に興味あるみたい」

ソラト「けど、獣人が出現して雰囲気が一変。奴等の狙いは一体……？」

エドワード「次回、魔法戦記リリカルなのはWarriors 第5話……撃ち墜とす」

エドワード「セブン・シンズとは一体……？」

第5話 …… 撃ち墜とす

JS事件から約2年後――

その功績から、機動六課は正式な部隊として再結成される事になりました。

攻める手をやめない獣人達。

彼等が狙う「セブン・シンズ」とは？そして、彼等を操る黒幕は？
謎はまだまだ多い……。

魔法戦記リリカルなのはWarriors、はじまります。

（語り手：ギンガ・ナカジマ）

魔法戦記リリカルなのはWarriors

第5話 …… 撃ち墜とす

機動六課にある、会議室。

そこに各フォワード分隊の隊長、副隊長が集められていた。

「皆に集まってもらったのは他でもない、獣人達のことや」

集めた張本人のはやてが口を開く。

と、同時にモニターにこれまで戦った獣人の映像が流れた。

「今まで確認された獣人は、理性のあるものとないに分けられる」

これまで他の世界で確認させたもの、そして先日ジャックが戦ったコンドル獣人は、理性があるように見えた。

一方、シルヴァスやソラトが戦った馬、猪の獣人は闘争本能に従って暴れていた。

「獣人にもいろいろあるんだね」

「そうだったわけ……？」

なのはが発言すると、シルヴァスが頭を傾げる。
自分が倒した獣人を覚えてないらしい。

「んで、奴等には共通点がある」

次にはやてが操作すると、モニターに地図が現れた。

「これまで獣人がミッドに現れた時の図だね」

フェイトが補足説明をする。

「でも、何の共通点があんだ？」

だが、ヴィータが不思議に思い尋ねた。

確かに、分布はバラバラで規則性はないように見える。

「でもこうすると……」

はやてがまたもや操作する。
モニターには、獣人の出現地点と被るように別のマークが映し出された。

「何だこりゃ？」

「恐らく、ロストロギアですね」

シグナムの言う通り、ロストロギアの反応があった場所だ。

「正解。獣人はロストロギアの反応がある場所に送られとった」

「じゃ、今後は先回り出来んじゃない！」

シルヴァスが1人浮かれるが、はやては首を横に振る。

「そうはいかん。ロストロギアの種類はバラバラ。中には影響の小さすぎる物まであったんや」

「手当たり次第って感じだね……」

少なすぎる共通点に、なのは達は顔を顰めた。

一方、スバル達は陸士108部隊と合同で警邏にあたっていた。

「「ギン姉！」」

「スバル〜！ソラト〜！」

108部隊には、スバルの姉のギンガがいた。

久々の再会にスバルと、幼なじみのソラトは浮かっていた。

「久しぶりだな、ギンガ」

「エド、寂しくなかった？」
「……………」

顔を背けるエドワード。

エドワードはギンガの恋人であり、六課以前は108部隊所属だったのだ。

反論しないということは、少なからず寂しかったのだろう。

「皆も、久しぶりね」

「はい！」

「お元氣そうで何よりです」

JS事件時にギンガは六課に出向したことがある為、エリオ達とも顔見知りである。

ティアナとは六課以前に、スバルの紹介で会ったことがあった。

「さ、敵はいつ攻めてくるか分からないから油断しちゃダメよ」

「……………はい！」

場所を戻して六課会議室。

「けどよ、連中が狙ってるモンが何か分かってんだろ？」

納得が出来ないという風にシルヴァスが言う。

「それや。奴等が手当たり次第になつとる理由は」

モニターに今度はある像が移りだされた。

「S級ロストロギア、セブン・シンズ。これが奴等の狙い」

緑色で、狐のように見える像だ。

「これとは形も色も違う物が7つある」

他の像は未確認であり、管理局でも操作が続けられている。

「因みに、これは「強欲^{グリード}」。この前何者かに奪われた物や。所有者も行方不明、現場には少量の血とアタツシukeースだけが残ってた」

十中八九死んだのだろう。

ここにいる誰もがそう思った。

「セブン・シンズ最大の特徴は、特有の反応にある」

膨大な量の魔力を有しているため、特殊な反応を放っているのだ。

「けど、それを読み取るには当たり外れが大きくてな」

他のロストロギアの反応によく似ていたり、コロコロと反応が変わったりするため、測定装置が間違えて他のロストロギアの反応を拾ってしまう。

「確実性が無いから、手当たり次第に調査しないと分からないってことだね」

「その通り」

「めんどくせー」

ジャックが現状を理解すると、シルヴァスが子供みたく文句を垂れた。

「ところで、エドさんとギンガさんの馴れ初めってどんな感じなんですか？」

ふと、キャラが尋ねる。

「そういえば聞いたことなかったわね……是非教えてください！」
「私も気になるー！」

ティアナや、通信で話を聞いていたシャリオまで便乗する。

「え、え……」

当の本人であるギンガは顔を赤くしながら苦笑い。

エドワードに至っては早歩きでさつさと先に行ってしまった。

「そうだ、スバルとソラトの」

「もう聞きました」

「そうだった？」

以前、ギンガは同じ手で逃れたのだが、流石に2度目は通じなかった。

「そうなのスバル！？」

「うん……あはは」

ソラトは自分達の馴れ初めを話されたことを知らず、驚いていた。

「えーと……」

最早逃げ場もなく、何から話していいのかと思いつき返すギンガ。

「っ！来るぞ！」

しかし、それはエドワードの一言に遮られた。

路地から現れたのはネオガジェット・タイプA。数は十数体程。その背後からは、クマに似た獣人が控えていた。

「あ？公僕共見つけてどーすんだよ」

言葉を話す辺り、理性がある方だ。

「止まれ。貴様には聞きたいことがある」

エドワードがクマの獣人と対峙する。

「はあ？こつちには用はねえ！」

獣人の合図で、ネオガジェットがエドワードに襲い掛かった。

「ブレイブアサルト、セットアップ」

「Standing by」

しかし、エドワードは素早く両腕を左腕の上に交差させて前へ突き出し、そのまま右腕を内側へ入れる様に腕を回し、胸の前へ持つて来る。

すると、左腕の腕輪が光り出し藍色の帯常魔法陣が現れ、エドワードを包んで守った。

そして中から赤いシャツの上に、黒地に赤いラインが入ったスーツ、青いズボンの姿になったエドワードが現れた。

右手にはライフル型デバイス、ブレイブアサルトが握られている。

「抵抗するなら……打ち墜とす！」

後ろでも、デバイスを起動させたギンガ達がネオガジェットと戦闘を行っていた。

「でりゃあああああー！」

抜群のコンビネーションでタイプAを次々に破壊していくナカジマ姉妹。

「はああああー！」

負けじと、ソラトとエリオもネオガジェットの軍団を一掃する。

「くっ、キリがない！」

「こんなに、何処から……」

離れたところではティアナが援護射撃、キャロはフリードリヒを操り火炎攻撃を仕掛けていた。

だが、誰もがすぐに異変に気付いた。

最初は十数体しかいなかったはずが、倒しても倒してもワラワラと

湧いて出る。

「転移魔法……何処から!？」

転移魔法の出所を辿れば、敵の尻尾を掴めるかもしれない。

「シャーリー!」

「やってみる!」

ティアナはシャリオに転移魔法の地点と魔力を探らせた。

「……場所は右37度の方角!魔力は……嘘っ!?!探知出来ない!」
「えっ!?!」

敵もみすみす探られるようなことはしなかったようだ。

ティアナは渋々、スバル達に転移魔法の地点を叩くよう指示した。

ソラト達がネオガジェットと戦っている間、エドワードは獣人と睨み合っていた。

「言え、ロストロギアは何処だ?」

「こちらが質問をする方だ。貴様等の正体と黒幕、セブンシンズについて!」

銃を構えているのはエドワードの方だが、獣人は余裕そうだ。

「なら情報交換ってのはどうだ?」

「情報交換?」

この近辺にあるロストロギアの場所を教えるだけで、相手の情報を

得られる。

しかし、相手は何故こんな取引を？

この程度の情報を与えただけでは状況は変わらないと？

勿論、罠の可能性もある。

偽の情報を与え、混乱させることも考えられる。

「オラ、どーした？探すのめんどくせえから早くしろ」

エドワードは迷っていた。

あの獣人に理性はあるが知恵があるとは思えない。

だが、独断で敵に情報を送るのはどうだろうか。

「答えは……NOだ！」

エドワードは獣人の頭を狙撃する。

が、ギリギリでかわされてしまう。

「チツ、じゃあ食ってやる！」

獣人も臨戦態勢に入る。

鋭い爪をむき出しにして、エドワードに襲い掛かった。

「遅い」

〔F o r t e b u r s t 〕

獣人の巨体は的として狙いやすかった。

エドワードは腕を狙い撃ち、獣人の突進を避けた。

「があああああ!?!」

分厚い毛皮と筋肉で覆われているので致命傷までには至らなかった。

「フォルムツヴァイ」

〔Shot form〕

エドワードはライフルを拳銃型に変形させ、連続で敵を打つ。

「無駄無駄ア!」

獣人はびくともせず、エドワードに爪を振り下ろす。

〔Net bullet〕

間一髪、エドワードが避けると同時に、一発を懐に打つ。

「なっ!?!」

それは普通の魔力弾と違い、網のように獣人を縛るバインドとなった。

「貴様あああああ!?!」

「終わりだ」

〔Blaster smash〕

カートリッジをチャージし、光弾を獣人の口に打ち込む。
すると、光弾は口の中で円錐状に展開した。

「あがが!?!」

「ブラスター……！」

暴れる獣人だが、バインドの所為で動けない。
エドワードは走り、円錐へ飛び蹴りを放った。

「スマッシュー！」

エドワードはドリルのよう回転する円錐と共に獣人の体を貫き、
背後に着地した。

獣人が巨体を爆散させるまで、時間は要さなかった。

「エド！大丈夫！？」

獣人を倒すと同時にネオガジェットの転移も途絶えた。
戦いを終えたギンガは素早くエドワードに駆け寄る。

「ああ……すまない、情報を手にするチャンスを手放してしまった」

そう言ったエドワードの左腕には、大きな鉤爪の跡が出来ていた。
先程獣人の攻撃をかわした時に受けたらしい。

「どういうこと？いえ、それより手当てを！」

「大したことはない」

「マスター、また病院送りにされたいんですか？」

相方のブレイブアサルトにまで言われてしまい、大人しく手当てを
受けるエドワードだった。

「獣人が情報交換を持ちかけてきたんだ」

ギンガに包帯を巻かれながら、獣人との会話を皆に話す。

「相手の情報を教える代わりにロストログアの、セブン・シンズの在り処を教えろ、と」

単独行動は味方を危険に晒す。

エドワードはそれが分かっていたから、取り引きに応じなかった。

「捕獲も難しかったから倒してしまったが……すまない」

「エド兄は悪くないよ!」

「私達でもそうしたと思う!」

弟分と妹分がエドワードを励ます。

「何も間違った行動はしてないわ」

「そうか……」

仲間達の言葉に安堵するエドワードだった。

だが、彼等は気付いていない。

「第3ビルか……ふーん、意外と近かったね」

敵は既にロストログアの位置を特定済みだったことを。

第5話 …… 撃ち墜とす（後書き）

次回予告

スバル「マリーさんの協力で、回収した破片からネオガジェットが調査される。そして、敵の正体へ……」

ティアナ「その頃、クラナガン第3ビルに侵入する男が現れた」

ソラト「敵の正体、そして大胆すぎる行動が……！」

スバル「次回、魔法戦記リリカルなのはWarriors 第6話
狂気の悪魔」

エドワード「この声、聞いたことがある……？」

第6話 狂気の悪魔

ギン姉達との合同警邏の途中、セブン・シンズを探す獣人等の襲撃を受ける。

敵の正体を探りきれないまま、僕達は何とか獣人を倒した。

そして、破壊したネオガジェットの残骸から彼等を操る黒幕の調査が始まる。

謎はまだまだ多い……。

魔法戦記リリカルなのはWarriors、はじまります。

(語り手：ソラト・レイグラント)

魔法戦記リリカルなのはWarriors

第6話 狂気の悪魔

その日、機動六課を訪れた女性が1人いた。
鶯色の髪に眼鏡を掛け、白衣を着た女性。

「マリーさん、待ってました!」

「こんにちは、はやてちゃん」

マリエル・アテンザ。

時空管理局本局の技術官であり、はやてを始め六課の様々な人間がお世話になった人物である。

彼女が呼ばれた理由は2つあった。

まずはナカジマ姉妹の健康診断。

「で、例の品は？」

「こつちです」

そしてもう1つが、破壊されたネオガジェットの破片の検査。研究室では、シャリオが簡単な調査を行っていた。

「何か分かった？」

「いいえ、さっぱりです」

しかし、シャリオはデバイス担当のメカニック。自立機械のネオガジェットは残念ながら専門外だ。

「そつか……しゃあないな」

「面目ないです」

「ええって、専門外やし」

肩を落とすシャリオを慰めるはやて。

「その為にマリエル技官を呼んだんやで？」

「お任せを！」

「お願いします」

「プチ師弟」関係のマリエルとシャリオ。

充分やる気のマリエルに、シャリオは尊敬の眼差しを向けながら期待していた。

同時刻、クラナガン第3ビル。

ここでは管理局があるロストログアを調査の為に保管していた。故に警備は万全だったのだが……。

「侵入者は現在17階にいる模様です！」

侵入者が現れたのだ。

「だああああああ！？見つかったああああああ！？」

奇声をあげて逃走しているのは、見た目がごく普通の男性。黒髪に緑の眼。武器はどうやら拳銃のみらしい。

実はこの男、人造魔導師である。

「チクショー、何なんだよ！もう！」

追手を巻き、息を上げて悪態を吐く男。

「落ち着いて、プロファイア」

プロファイアと呼ばれた男が通信を開く。

「でもよおドクター！あの大人数じゃ無理だつて！」

「君の任務はロストログアの正確な居場所に辿り着くこと。戦闘じゃないから平気さ」

気弱なプロフィールを宥める通信相手。

ドクターと呼ばれている男は薄暗い部屋にいるが、白衣を着て眼鏡をかけていることは分かる。

「もつと上の階だ。頑張ってくれたまえ」

「そんなあゝ！」

通信を一方的に切られ、プロフィールは弱音を吐いた。

本来、戦闘用でないプロフィールは任務自体を嫌がっていた。

しかし、断れば何をされるか分かったものではない。

実験台にされて死ぬより、いくらか生き延びる可能性のある潜入任務を選んだのだった。

身を潜め、息を整えるとプロフィールは階段を上り始めた。

「くそつ、やってやらあ！」

目当てのロストログアはもつと上の階だ。

通常ならエレベーターを使うのだが、すぐに見つかってしまう。

パンパンになる足を叩きながらプロフィールは進んだ。

六課の研究室では、マリエルの手によってネオガジェットの解析が進められていた。

「これは……！」

過去、ジェイル・スカリエッティが開発したガジェットと照らし合わせ、正体が明かされる。

解析が始まってから約5時間。

「終わりました」

神妙な表情をしたマリエルからの報告があった。

「どうでした？」

はやてが尋ねると、マリエルはモニターにデータを映した。

「これは、J S事件の時のガジェットとほぼ同一のものです」

素材や中のコンピューターまで、同じだとマリエルは付け加えた。

「でも、スカリエッティは！」

「拘置所の中や……」

態度に変わりはないが、スカリエッティは現在軌道拘置所に拘留中である。

当然、外との連絡も取れない。

「じゃあ、誰が……」

「スカリエッティのように、プレートに名前も掘ってません。そこで、カメラにあったメモリーデータを解読しました」

マリエルはボードを打ち込み、抽出した映像を出す。

映し出されたのは、薄緑色の髪を後ろで結んだ、眼鏡の男性だった。

「この男が、犯人……」

プロフィアは未だに階段を上っていた。

目的の階は47階。道程は長い。

「クソッ、何で俺が……」

いつそ獣人にされた方がマシだったかもしれない。

しかし、現在何階にいるか確認した時、プロフィアに希望の光が見えた。

「46階……っしゃあ！」

あと1階上れば、任務達成までもう少し。

プロフィアは上りきり、ついに47階まで辿り着いた。

「はははっ！ やったぜドクター！」

「おめでとう。目当ての部屋はここだよ」

通信を開くと、ドクターはプロフィアに階の図面を送った。

「いたぞ！」

と、同時に局員に見つかってしまった。

どうやら歓喜の声が大きすぎたらしい。

「じゃ、頑張れ」

「どわあああああ！？」

休む間もなく、プロフィアは局員から逃げなくてはならなかった。

はやては衛生軌道拘置所に通信をかけていた。

ネオガジェットが何故ガジェットに似ているのか、そしてメモリー

に映っていた男は誰なのか。

スカリエッティなら知っているかもしれないからだ。許可を得て、スカリエッティに事情聴取を開始した。

「やあ。一体何の用かな」

手枷をはめ、不遜な笑みでこちらを見るスカリエッティに、はやての緊張が増す。

「あなたの事件とは別件で、聞きたいことがあります」

「ふむ、内容によるね」

「……この男を知っているでしょうか」

はやてはスカリエッティに例の映像を見せた。すると、スカリエッティは笑いながら答えた。

「ククク、ああ。知っている。彼は私の同志だ。祭の時も協力してくれた」

何と、あの男はスカリエッティの事件にも関わっていた。衝撃の事実息を呑むはやて達。

「では、ネオガジェットは……」

「私が与えたデータを独自に改良したのだろう」

この話が事実ならば、相手はかなり危険で手強い犯罪者だ。スカリエッティは懐かしそうに話を続けた。

「彼もまた優秀な科学者だった……少々命の価値を安く見ていたがね」

「……もつと詳しく聞かせてもらえますか？」

「それは残念だが、無理だ」

はやては僅かな希望を感じたが、スカリエッティは表情を変えず、淡々と答えた。

「私も彼についてはそれほど詳しくない。興味もなかったしね。第一、余計なことを喋って殺されたら困る」

男は、拘置所にいるスカリエッティが命の心配をするほど危険なのだろう。

ネオガジェットや獣人を生み出し、「セブン・シンズ」を狙う謎の人物。

「せめて、名前だけでも教えてもらえないでしょうか？」

「ああ、男の名は……マルバス・マラネロだよ」

そして、名前だけが今回得られた数少ない情報だった。

プロフィールは全力で走っていた。

47階では外へ逃げることも出来ない。

階段やエレベーターも包囲されて、逃げ道はほぼ塞がれていた。

必死にドクターに転移装置を作動させるよう訴えるが、指定の位置へ行くまでダメだと言われてしまっている。

「クソがあ！」

自棄になり銃を構えるが、先に射撃魔法を放たれ、打ち落とされて

しまう。

「ひっ!?!」

更に、焦って部屋に入り込んでしまったために、あっさりと包囲されていた。

「ここまでだな」

8人の局員が杖を向けている。

背後には壁。出入口は遥か遠く。

武器もなくなり、本格的に抵抗手段がなくなった。

「よくやったね」

その時、ドクターからの通信が聞こえた。

唯一運のいいことに、指定された部屋に到達していたのだ。

「……マジ? ハハハッ! やったー!」

さっきまで怯えていたプロフィアの顔が一気に自信満々に変化する。

「貴様! 今のは誰なんだ!?!」

「お前等なんかに俺が捕まるかつての!」

「もつと後ろに寄るんだ」

挑発するプロフィアに、ドクターが指示を下す。

プロフィアが下がり、壁に背中を付けると、緑色の光が足元に現れ

る。

プロフィアは勝利を確信し、光に包まれた。

その瞬間、ビルの中で爆発が起きた。

何が起きたのか、局員達は理解出来なかった。

ただ分かったのは、目の前で追い詰めていた男が爆発したのだ。

黒い爆煙と肉が焼けた匂いが周囲を包む。

爆風と飛び散った肉片を受けて何人も目や耳を負傷。重傷を負った者もいる。死者が出たかもしれない。

「な、何が……」

グループの隊長や比較的軽傷だった人間が周囲を警戒する。

「やあ」

1人の男が煙の中を歩いてくる。

その声は、先程の通信のものと同一だった。

人を1人、爆発させて置きながら、全く気にせず迫ってくる。

「何者だ!？」

隊長が杖を向けると、男は右腕をあげた。

「まあまあ諸君落ち着いて。この手に注目してくれたまえ」

ヒラヒラと右手を見せる。何も持っていないことは明らかだ。

だが突然、隊長の隣にいた隊員の額にナイフが刺さった。

「なっ！？」

右手に注目を集めながら、男は左手でナイフを投げていたのだ。

「き、貴様ああああ！」

「落ち着けと言ったはずだけどねえ」

激昂して杖を構える隊長を嘲笑いながら、白衣の袖からナイフを出して投げる。

ナイフは隊長の手に刺さり、激痛で杖を落としてしまう。

次いで、動ける者達の頭や腕にもナイフを投げ、戦闘不能にしている。

「ふむ……これもハズレか」

倒した局員達に目もくれず、男は部屋にあったロストログアを確認する。

セブン・シンズの1つではないことが分かると、ロストログアを捨て、周囲に何かを仕掛けだした。

「クソッ！この悪魔がつ！」

仲間を殺され、怒りを顕にする隊長。

「悪魔、ねえ……君は本当の悪魔を見たことがあるかい？」

隊長の言葉に初めて男が答える。

広い次元世界、悪魔と呼ばれる種族もいるかもしれない。しかし、隊長は悪魔を見たことがなく、首を横に振った。すると、白衣の男はニツと笑って言った。

「奇遇だね。私もないよ」

そして、口笛を吹きながら現れた位置へ移動。緑色の光に包まれて消えた。

その数分後、47階で更に巨大な爆発が発生。ビルは倒壊した。その場にいた8人の局員は当然死亡、ビルにいた人間からも何十人も死傷者を出した。

数日後、奇跡的に残った監視カメラの映像を六課フォワード陣が見ていた。

ネオガジェットメモリーに移っていたのと同じ人物が局員を何人も殺し、平然としている。

「酷い……」

ショッキングな映像に怒りを覚えるソラト。

他のメンバーも言葉を失い、特にキャロは口を覆って泣きそうにな

っている。

そんな中、エドワードは冷静に分析していた。

「この声、聞いたことがある……？」

「えっ？」

J・S事件の時、巨大ガジェットを撃ち落としたエドワード。

マラネロの声を、その時に聞いたかもしれないのだ。

ならば、あの時のようにタイプゼロと呼ばれるギンガとスバルが狙われる可能性がある。

「目的は分からないが……スバル、用心した方がいい」

「う、うん……」

「大丈夫！スバルは僕が守る！」

昔と変わらぬ真っ直ぐな眼でエドワードを見るソラト。

「ありがとう、ソラト」

「スバル」

いつもの甘々空間を作り出す2人に苦笑しつつ、この心配が杞憂に終わることを願うエドワードであった。

第6話 狂気の悪魔（後書き）

次回予告

キャラ「久しぶりの長期休暇にルーちゃんと会えることになった私とエリオ君」

エリオ「楽しい旅行になるはずが、何故かキャラとルーの薬草摘み勝負に。景品は……僕!？」

キャラ「のどかな無人世界の筈なのに、私達以外の誰かの気配……まさか密猟者!？」

ルーテシア「次回、魔法戦記リリカルなのはWarriors 第7話 覚醒する雷」

エリオ「2人に手出しはさせない!」

第7話 覚醒する雷

クラナガンの次元港。

今日も多くの旅行者で溢れている。

「「では、行つてきます」」

エリオとキャロ、六課ライトニング分隊のフォワード2人も、本日は休暇を取り旅行へ向かおうとしていた。

「2人共忘れ物はない？着いたら連絡入れてね？」

見送りに来ていた、2人の保護責任者であるフェイトは最後まで心配していた。

「だ、大丈夫ですよ」

「お土産持って帰りますね」

心配性の保護者兼上司に苦笑しつつ、2人は臨行次元船に向かっていった。

「大丈夫かな……？」

「フェイトちゃんは心配すぎだよ」

同伴していたなのも苦笑いである。

2人の行き先は、友人であるルーテシア・アルピーノが住んでいる無人世界、カルナージだ。

ルーテシアは訳あって、J・S事件ではスカリエツィに協力し、エリオ達と敵対していた。

事件解決後は和解し、現在まで交友関係を保っているのだ。

「ルーと会うのも久々だね、キャロ」

「うん！楽しみ〜」

「キュクル〜」

文通こそしていたが、直に会うのは1年ぶりくらいだ。
鞆の中のフリードリヒも楽しみそうに鳴いた。

2人と1匹は友人との再会に、期待で胸を膨らませていた。

魔法戦記リリカルなのはWarriors

第7話 覚醒する雷

一方、六課ではライトニング分隊が休暇なので、スターズとウィンドで模擬戦を行っていた。

「でりゃあああああ！」

「わわっ！？」

スバルの拳をセラフィムで防ぐソラト。
模擬戦とはいえ、愛しの彼女に剣を振ることに気が引けるようで。

「どうしたの、ソラト？」

「な、何でもないよ！これは模擬戦、模擬戦なんだ……」

自分に言い付けても、どうしても打ち込みに力が入らない。

「！」

何処からか飛んできた光弾をスバルは咄嗟に避ける。

「ソラト、しっかりしろ。スバルが手抜きを喜ぶと思っているのか？」

「エド兄……ごめん！」

エドワードからの叱咤を受け、漸く気合が入ったようだ。

「スバル、ここから手加減なしたよ！」

「うん！」

ソラトとスバルが再度向き合った所で、藍色と橙色の光弾が幾つもぶつかり合った。

「やるな、ティアナ」

「エドさんこそ！」

後衛であるエドワードとティアナも射撃対決で盛り上がっていた。

「頑張ってるね、彼等も」

そんなフォワード達の様子を見に来たジャック。

「当然だ。アタシとなのはが鍛えてんだからな」

隣では、つい先日恋人となったヴィータが胸を張っている。

「でも、アタシからするとまだまだだな」

「ヴィータ教官は厳しいね」

教え子を褒められ、照れ隠しなのかツンとした態度をとるヴィータに、ジャックはニヤニヤした視線を向けるのだった。

同時刻、オフィスではウィンド分隊長補佐、シルフが書類を纏めていた。

因みに、シルヴアスはサボりである。

「あの野郎……」

こっそり自身の仕事を自分の仕事に混ぜた相棒に、シルフは怒りを募らせていた。

「はやてに報告して減給させてやる……」

イライラしつつ、テキパキと仕事をこなす。

シルフは戦闘よりデスクワークが得意なのだそう。

「シルフ！仕事は終わりそうですか？」

そこへ、彼と同じユニゾンデバイスである、リインフォース？が現

れた。

リインは部隊長補佐であるが、現在は休憩時間中だ。

「終わんねえ……どこぞのバカが仕事押し付けやがったからな！」

「そ、それはご愁傷様なのです……」

普段ユニゾンデバイス同士、仲のいい2人だが、今のシルフの状態に苦笑するしかないリインだった。

「折角デートしようと思っていたのに……」

「ん？」

「な、何でもないです！」

リインの呟きも、シルフは仕事に集中していて気が付かなかったようだ。

「シルフ！仕事は……まだみたいだな」

そして、3体目のユニゾンデバイスのアギトもやってきた。

彼女はライトニング分隊副隊長、シグナムの補佐である。

シグナムは仕事を押し付ける真似はしないので、彼女も自身の分の仕事を既に終わらせていた。

「アギト……シグナムに、あのバカを一回ぶった斬るよう言ってくんねえかな？」

シルフのテンションがドンドンおかしな方へ向かっている。

結局、リイン達がシルヴァスを呼び出して仕事をやらせるよう命じ、

漸くシルフは休憩に入ることが出来た。

クラナガンを発って4時間後、エリオとキャロはカルナージに到着した。

次元港を出ると、黒い体に紫のマフラーを着けた怪人が2人を出迎えた。

「ガリユー！久しぶり！」

エリオが声を掛けると、ガリユーは軽くお辞儀をした。

ガリユーはルーテシアの使役虫であり、自律行動を許される程信頼を受けている。

自身も言葉は喋れないが、礼儀正しい性格でルーテシアやその母、メガーヌの手伝いをよくしている。

「キョクル」

フリードリヒも懐いているようで、鞆から出るとガリユーの肩にとまった。

ガリユーの案内でアルピーノ家に向かう。

山道を暫く歩くと、無人世界の大自然の中に一軒の家が見えてきた。その前では、紫髪の綺麗な女性が花壇に水をやっていた。

「あら、エリオ君、キャロちゃん。いらっしやい」

2人が来たことに気付くと、優しい笑顔で迎え入れる。

「こんにちは、メガーヌさん」
「お世話になります」

女性に挨拶する2人。彼女がルーテシアの母、メガーヌである。
彼女はJ・S事件で捕えられ、救出した直後は車椅子での生活を余儀なくされたが、現在では普通に歩けるまで回復した。

「エリオ、キャロ」

そして、家の中からメガーヌを幼くした感じの大人しそうな少女が出て来た。

彼女こそ2人の友人、ルーテシア・アルピーノだ。

「ルー！」

「久しぶり、ルーちゃん！」

再会を喜ぶ3人。しかし、キャロは若干引きつっていた。

理由は身長差にあった。男子のエリオはともかく、ルーテシアにも軽く負けている。

「エリオは大きくなった。キャロは……あまり変わらない」
「はうっ！？ま、まだ伸びるもん！」

静かに笑うルーテシアにショックを受けるキャロであった。

部屋に案内してもらい荷物を降ろすと、テラスにてメガーヌが淹れた紅茶を飲みながら、エリオとキャロ今まであったことを話す。

「獣人……マラネロ……」

スカリエツティの元に長くいたルーテシアも、マラネロについてはまったく知らなかった。

「ごめん、力になれなくて……」

「気にしないで、ルーちゃん」

落ち込むルーテシアをキャロが励ます。

「奴等はロストロギアなら無差別に狙ってきます。ここにはロストロギアはないから安全ですが……」

「大丈夫よ。ガリユーやルーテシアのお友達もいるし」

メガーヌの言葉にガリユーが頷く。

お友達というのは、インゼクトやこの世界の虫達だろう。

魔力制限により地雷王や白天王は召喚できないが、虫と心を通わせる能力は健在だ。

「はい。僕達も早くマラネロ達を捕まえます」

「頑張つて、エリオ」

エリオに優しく微笑むルーテシア。

この雰囲気、キャロの何かを揺さ振った。

模擬戦を終え、ティアナは木陰で休憩をしていた。

因みに勝負の結果は、時間切れで引き分けであった。

「お疲れさん」

そこへ六課のヘリパイロット、ヴァイス・グランセニックがやってきた。

ヴァイスは現在武装隊にも狙撃手として所属しており、エースとしての腕前を持っている。

その為、同じ射撃タイプのティアナの何を何かと気にしていた。

「ありがとうございます」

差し出されたドリンクを受け取るティアナ。

「で、執務官勉強の調子はどうだ？」

ティアナの目標は執務官。その為の勉強も、仕事の合間にこなしている。

「ええ、フェイトさんがよく教えてくれるので」

「そりゃ結構だ……が、トレーニングも疎かにすんじゃねえぞ？」

執務官はデスクワークが多くなってしまいがちで、どうしても体力が落ちてしまう。

ヴァイスの見立ては正確で、実際にティアナはバテるのが少し速くなっていた。

「わ、分かってますよ」

問題点を的確に突かれ、焦ってしまうティアナ。

しかし、それだけヴァイスが自分のことを気に掛けてくれていると思えば、嬉しくもなるのであった。

一方、やっと休憩に入れたシルフは食堂で少し遅めの昼食を食べていた。

「シルフ、あーんですっ」

「こっちもだ！」

リインフォースとアギトも一緒に。

「お、お前等なあ……」

両手に花状態のシルフに周囲の男性局員達は嫉妬の眼差しを向けていた。

シルフは恥ずかしさで左右からのフォークに口を付けずに黙々と食べていた。

「む……」

「う……」

シルフが食べてくれないので、リインもアギトも段々と頬を膨らませる。

「……分かったよ」

視線に耐えかね、とうとうシルフは両方共口にした。

「シルフは素直じゃねえな」

「まったくです」

「はあ……」

機嫌を取り戻す2人に、再び溜息を吐く。

この日は仕事以外はこの板挟みから解放されないシルフであった。

ティータイムを終え、エリオ達はルーテシアの提案で野草を摘みに行くことにした。

「この辺りのハーブはいい香りがするのよ」

と言い、メガーヌはエリオに巨大な籠を渡した。
ガリユーも行くようで、既に籠を背負っていた。

聊かシユールな光景であることを、エリオは黙っていた。

「ルーちゃん、どっちが多く採れるか競争しよう？」

「面白い……受けて立つ」

そして、隣ではキャロとルーテシアが火花を散らせていた。

「勝ったらエリオとデート」

「ええっ!？」

「いいよ!」

「よくないよっ!？」

勝手に賞品にされ、戸惑うエリオを余所に2人の少女は盛り上がっていた。

「あらあら」

娘達のやりとりを微笑ましく見守るメガーヌ。

「どうしてこんなことに……」

1人状況が全く理解出来ない内に話が進んでしまい、エリオは困惑した。

「……………」

そんなエリオを不憫に思ったのか、肩を優しく叩くガリユーであった。

3人はそれぞれ分かれて野草を摘みに行った。

「この勝負……もらった」

キャロとの対決は、この周辺のことをよく知るルーテシアが有利だった。

「これは……あつ、こんなもあるんだ」

しかし、キャロも自然保護隊に所属していた時の知恵があり、負けていない。

「ガリユー、これは大丈夫かな？」

ただ、エリオは野草の知識に乏しいのでガリユーに聞きながら採っていた。

後に、ガリユーのようにエリオに教えながら摘んだ方がよかったのでは？と、キャロとルーテシアは後悔することになったとか。

「大分溜まってきたなあ……あっ！」

そろそろ籠の半分くらい摘んだ時、キャロはある光景を見つけた。

「この辺は無人だから狩り放題だな」

そう、密猟者である。

このような自然豊かな世界には珍しい動物が数多く存在する。それ等を捕獲し、高値で売ろうという者が後を絶たない。

管理局によって自然保護区域に指定されているにも関わらず、密猟者はやってくる。カルナージも例外ではかった。

「どうしよう、フリードはエリオ君と一緒にだし……」

召喚魔法を使ってもいいのだが、気付かれる可能性が高い。

「とにかく、エリオ君に連絡しなきゃ……」

「キャロ？」

丁度その時、何も知らないルーテシアがやってきた。

「ルーちゃん、しーっ！」

「？」

「誰かいんのか！？」

ルーテシアの声に密猟者が気付いてしまった。

「管理局です！武器を置いて大人しくしてください！」

気付かれたからには仕方がない。

キャラは密猟者の前に現れ、管理局員の証を見せた。

「なっ!?!……って、ガキじゃねえか」

しかし、キャラを子供と見て小馬鹿にする。

「子供でも局員です!」

「甘く見ないほうがいい」

ルーテシアも加わり、2対1となる。

「へっ、罠の中だつてのに偉そうだな!」

密猟者は手に持っていたリモコンを押した。

すると周囲に仕込んであった機械が作動する。

「これは!?!」

「まさか……」

2人はこの感覚に覚えがあった。

特殊なフィールドが発生し、力を奪われるような感じ。

「どうだよ? AMFの感じは?」
アンチ・マギリング・フィールド

そう、ガジェット達に装備されているAMFだったのだ。

不意打ちによりデバイス起動すら行えなくなってしまった2人に、密猟者は質量兵器である猟銃を向けた。

「大人しくするのはそっちだったな、局員のお嬢ちゃん達」

銃口はキャロに向けられ、重い引き金は引かれた。

「キャロー!!」

しかし、銃弾はキャロに届くことはなかった。

「大丈夫？2人共」

頭上から現れた少年は白い上着をなびかせ、青い槍を構えている。
間一髪、エリオが自身のデバイス、ストラードで銃弾を弾いたのだ。

「「エリオ（君）!!」」

現れた槍騎士に歓喜の声をあげるキャロとルーテシア。
エリオは2人の無事を確認すると表情を一変し、密猟者を睨む。

「自然保護法違反、質量兵器の無断所持、公務執行妨害……そして、
2人を傷付けようとしたことで、お前を逮捕する!!」

エリオの怒りが珍しく爆発していた。

「やれるモンならやってみろ!!」

今度は拳銃を乱射する密猟者。

「S o n i c m o v e」

しかし、電気を帯びた高速移動でことごとく躲していく。

A M Fへの対処法はガジェットとの戦闘で既に慣れており、デバイスを起動させていれば魔法も多少使える。だが、行動にも限界が生じる。エリオは素早く終わらせることにした。

「はあっ！」

密猟者の背後に回り込み、思い切り蹴り上げる。

「ぐあっ!？」

「まだまだあ！」

続いて前方に回り、その速度のまま蹴り飛ばした密猟者より高く飛び上がる。

「ライティングクラッシュ！」

そして、雷を纏った蹴りを密猟者の腹に叩き込んだ。

同時にガリユーがA M F発生装置を破壊し終えたおかげで、バインドも使用できるようになった。

その後、逮捕された密猟者はキャロの通報を受けた局員によって連行された。

「エリオ君、さっきはありがとう」
「あ、うん……」

改めてお礼を言われ、急に照れ臭くなりエリオは頬を赤くしてしま
う。

「さあ、帰ろう?」

「え? ちょ、ルー!?」

そんないいムードを壊すようにルーテシアがエリオの背中を押して
いった。

「む、エリオ君待つてよ!」

負けじとキャロも背中を押す。

この3人の関係に決着が着くのは、まだまだ先である。

因みに、野草摘みはガリユーのアシストがあつたエリオが勝つたそ
うな。

第7話 覚醒する雷（後書き）

次回予告

フェイト「私は戦いを楽しむシルヴァスのことが気になっていた…」

シルフ「アイツのことなんて気にしても仕方ないって言ったんだけどな」

フェイト「そんな中、彼に言われたことは……！」

フェイト「次回、魔法戦記リリカルなのはWarriorS 第8話 シルヴァスとフェイト」

シルヴァス「ま、気楽にやろうぜ？」

第8話 シルヴァスとフェイト

初めて会った時から、少しずつ気になっていた人がいます。
少年のように屈託なく笑い、不真面目さが目立つ彼は、戦いをゲームのように楽しむ。

そして、時折悲しそうな表情を浮かべる。まるで何かを悔やんでいるような……。

魔法戦記リリカルなのはWarriors、はじまります。

(語り手：フェイト・T・ハラオウン)

魔法戦記リリカルなのはWarriors

第8話 シルヴァスとフェイト

六課にある訓練用のシュミレーションルームに、シルヴァスはいた。
シルフ監視の元でデスクワークを早めに終わらせ、空いた時間に戦闘訓練をしようとしていたのだ。

「シャーリー、始めてくれ!」

「はい!」

部屋の外に話し掛けるシルヴァス。
外にあるコントロールルームではシャリオが新しい訓練プログラムを発動させていた。

「へっ、来やがったぜ」

部屋の奥から現れたのは、ネオガジェット・タイプAだった。但し、本物ではなくプログラムによって作られた仮想敵だ。

「行くぜーっ!!」

シルヴァスはいつもの調子で風を纏い、高速で飛び回る。そして1つ、また1つと斬り伏せていった。

「元気だな」

部屋の外からは、相棒のシルフが見学していた。

プログラム故に実体はないが、無数に出現させることが出来る。今回のプログラムでは100体設定だ。

「あらよつと!」

訓練用とはいえ、ただ攻撃されるだけではない。今までのデータを元に攻撃も行っ。

ネオガジェットからの攻撃を軽々と避けるシルヴァス。

「シルフ」

そこへ、新たな見物人が現れた。

「フェイト。どうした？お前も使うのか？」

「うん」

長い金髪を揺らしながら、フェイトは訓練を楽しむシルヴァスを眺める。

「……本当に楽しんでるんだね」

屈託のない笑顔を浮かべ、ネオガジェットを斬るシルヴァス。フェイトはそんなシルヴァスの異常性を気にしていた。

「バトルマニアだからな」

「うん……」

あっさりしたシルフの言葉にフェイトは頷く。しかし、それだけではない。

「まるで何かに取り憑かれたみたい……」

流れる汗を散らせ、豪快に機械を斬り刻む。

いくらバトルマニアとはいえ、戦うことに固執しすぎなのではないか？

その疑問に、シルフは顔を向けずに答える。

「アイツは戦うことしか知らないんだ」

「え？」

「他の娯楽といや、食うか寝るか。最近はバイクも好きだったか」

シルヴァスにとって、戦いとは娯楽なのだろうか。

強い敵と戦うのも、派手に戦うのも楽しいから。

しかし、それだけなのか？フェイトには理解出来なかった。

「ふいー。お、フェイトも見てたのか」

無事100体斬りを済ませ、シルヴァスがタオルで汗を拭きながら出て来た。

フェイトに気付くと、いつもの軽い調子で反応する。

「お前も訓練か？あ、どうせなら俺と戦ろうぜ？」

今さっき訓練を終えたばかりだというのに、戦闘意欲を燃やす。だが、フェイトは首を横に振った。

「違うの。シルヴァス」

一呼吸入れて、フェイトは話した。

「ちょっと、ドライブしない？」

フェイトの誘いに、シルヴァスとシルフは目を見開いて驚いた。今までに一度も、しかもフェイトのような美人にドライブに誘われたことがなかったからだ。

「マジ？俺とデート！？」

「おまつ、コイツなんか気にしても仕方ないって！」

片方は浮かれ、もう片方は慌てる。

「デートじゃないよ。シルフも一緒にどう？」

しかし、次に続いたフェイトの言葉でシルヴァスはすっかりこけてしまった。

「な、何だ……まあ、コイツが余計なことしないよう見張るか」

「さっきからひでえな、オイ！？」

「事実だろ」

落ち着いたシルフにシルヴァスが突っ込む。

2人の漫才のようなやり取りをフェイトは苦笑しながら見ていた。

「へえ、これがフェイトの車か」

フェイトの車は黒いスポーツカータイプで、ミッドでも人気の車種である。

普段の多少過保護な優しいお姉さんのフェイトとイメージが合わず、驚くシルヴァス。

因みに、シルヴァスがバイクでのツーリングを誘ったが断られた。車の方が好きだということもあるが、シルヴァスの下心が見え見えだったのが一番の理由だろう。

「じゃ、俺が助手席に」

「お前も後ろだ」

フェイトの隣に座ろうとするシルヴァスを、人間サイズになったシルフが引きずった。

「チツ。で、何処行くんだ？」

「んー……ちよつと走ろうか」

行先は未定らしい。

了解、と後ろ2人は後部座席でリラックスしていた。

「じゃあ、ちよつと飛ばすよ？」

「へ？」

出庫して道路に出ると、フェイトから不吉な一言。

周囲には他の車の姿も、速度制限もなし。

フェイトはレバーを引くと、スピードを上げた。

「どわあっ！？」

「ちよ、フェイトさん！？」

急にスピードを上げられ、慌てふためく2人。

後ろの声を余所に、フェイトは暫く車の走りを楽しんだのだった。

「し、死ぬかと思った……」

公道に出て、やっとスピードが落ち着く時には、シルヴァスとシル

フは既にぐったりとしていた。

「もうギブアップ？」

「予告なしに何してんだ！」

爽やかな笑顔のフェイトに怒るシルヴァス。

「でも、シルヴァスもバイクで走らないの？」

「車とバイクは別モンだ！」

「コイツのバイクテクも酷いモンだな」

「うるせえ！」

復活したシルフのキツイ言葉に、シルヴァスは拳で制裁を加える。

「2人は本当に仲がいいね。何時からの付き合いなの？」

相変わらずのやり取りに笑いながら、フェイトは尋ねる。

「俺がガキン時からだ」

「へえ」

「コイツ俺のプリンまで横取りしやがってな」

「んな昔の話は別にいいだろ？」

「一昨日もやったる！」

この時、フェイトはシルフが最初からシルヴァスの元にいたと思っていた。

3人は近くの喫茶店で休憩を取ることにした。

「ところで……シルヴァスは私達のことを知ってるんだって？」
「うっ！」

突然の質問に、ギクツと反応するシルヴァス。

実はシルヴァスは六課への転属の際、知り合いである無限書庫司書長のユーノ・スクライアからフェイトやはやて達の事件を聞いていたのだ。

「な、何でそれを」

「はやてから聞いた」

ジツと見るフェイトの視線を痛く感じる。

「……そうだよ、お前のことも闇の書も知ってる」

「じゃあ話して」

「けどこのことを誰にも……えっ？」

予想外のことを聞かれ、シルヴァスはキョトンとする。

「貴方のこと、話して。不公平でしょ？」

「「はあ？」」

シルヴァスとシルフには理解出来なかった。何故フェイトがシルヴァスのことを気にするのか。

「お前、俺のことが気になるのか？」

シルヴァスの問いかけにコクリと頷くフェイト。

「何でかはよく分からないけど……何でそんなに悲しそうなんだろ

うって」
「っ！」

フェイトの言葉に、シルヴァスの反応がピタリと停止した。
何か心当たりがあるようだ。

「シルヴァス……」

シルフが不安そうに見つめる。ここまで連れてきてもらった以上、
逃げることは出来なさそうだ。

「……フェイト」

沈黙を守っていたシルヴァスがゆっくりと口を開く。

「お前、俺と付き合わないか？」

シルヴァス・アルビレオとフェイト・T・ハラオウンの交際。

このニュースは管理局中に大きく響いた。

最初は根拠のない噂だったのだが、2人きりのドライブデート写真
がいつの間にか撮られており、証拠として裏付けられた。

実際は写真には、シルヴァスの隣に座っていたシルフが写っていな
かったただけだが。

「フェイトちゃん！あの噂って本当なん！？」

ドライブの翌日、はやてがフェイトにいきなり問い詰めた。

「噂って？」

「シルヴァス君と付き合ってるって噂や！」

「ああ……」

話題が分かった、フェイトは苦笑いしながら昨日の出来事を思い返す。

シルヴァスの突然の告白にフェイトは目を見開く。

「ブッ！？何言ってるんだテメーは！？」

隣にいたシルフも思わずコーヒーを嘔き出し、キレる。

「どうだ？付き合えば俺のことがいずれ分かるぜ？だが、付き合わないんだったら知る必要もなし、だ」

それはシルヴァスが取った苦肉の策だった。

この男はどうしても自身の過去を知られるのが嫌らしい。

「え、えと……」

まさかフェイトも告白されると思っておらず、戸惑いを見せる。

今まで仕事一筋で、告白されたことすらないフェイトには、どう対処していいのやら分からない。

「断るだろ？な、な？」

しかし、よくよく考えるとこの男はフラれること前提に告白している。

このことが、フェイトの女心に火を付けてしまった。

「いいよ。だから話して」

「なっ!?!」

予想外の展開に、今度はシルヴァスが驚く。

「マジか!?!」

「ま、まあシルヴァスのこと嫌いじゃないし……」

よく見ると、フェイトの頬が少し赤くなっている。
告白をしたシルヴァスも、実際満更でもなかった。フェイトのような美女が彼女になるのだから。

「お、お互い経験なしてみたいだし、まあ気楽にやろっぜ」
「うん……」

これが先日の一部始終だ。つまり、噂は事実ということになる。

「2人共思い切ったことすんなー……」

「言わないで! 恥ずかしかったんだから!」

どうやら、フェイトは既に半分後悔しているらしい。

「まあ、詳しいことは今度聞くんやろ? 私にも聞かせてくれる?」

「う、うん……」

しかし、これでこの件は解決しなかった。
噂は本局まで行き届いており、ある男を激しく激怒させていた。

「フェイトが、交際をなあ……」

フェイトの義兄、クロノ・ハラオウンである。

ユーノからシルヴァスの情報を聞き出し、素性を知ってますます怒りを募らせている。

「こんな男にフェイトを任せられないな……」

クロノは貯めていた休暇を使い、六課に足を運ぼうとしていた。

義理とはいえ、妹を誑かした男を退治するために。

第8話 シルヴァスとフェイト（後書き）

次回予告

フェイト「突然六課に現れたクロノは、シルヴァスに勝負を挑む」

シルフ「おいおい……相手は管理局提督じゃねえかって、シルヴァスは聞きやしない」

フェイト「クロノとのぶつかり合いの中、シルヴァスの秘められた何かが目覚める……」

フェイト「次回、魔法戦記リリカルなのはWarriorS 第9話 修羅」

シルフ「オイ、アイツを刺激すんな!」

第9話 修羅

突然の告白に戸惑う私。

気楽にやろうと彼は言うが、経験のない私はどうすればいいのかわからない。

そして、彼の秘密は私の義兄によって明かされる……。

魔法戦記リリカルなのはWarriors、はじまります。

（語り手：フェイト・T・ハラオウン）

魔法戦記リリカルなのはWarriors

第9話 修羅

その日はいつも通りの雰囲気だった。

フォワード達はなのはとヴィータの指導を受け、ジャックがそれを見学。

シルヴァスとフェイトの会話量が増えたぐらいで、昨日までと変わりはなかった。

しかし、1人の客の登場によって空気は変わってしまう。

「久しぶりだな、はやて、リイン」

部隊長室に現れたのは、時空管理局提督、クロノ・ハラウン。フェイトの義理の兄にあたり、また六課の後見人でもある。

「クロノ君！」

久々に友人と会い、はやても表情が明るくなる。

「けど、珍しいやん。仕事人間のクロノ君が急に有給なんて」

クロノはあまり有給休暇を取らないことで有名だ。

因みに申請に行った時、人事部は腰を抜かす程驚いたとか。

「ああ。ある噂を耳にしてな」

ラインの淹れたブラックコーヒーを飲みながら、静かに話すクロノ。その瞬間、はやてもラインも体をギクツと反応させてしまう。

「ほう……噂は本当のようだな」

クロノの眼が怪しく光った。

数十分後、部隊長室にフェイトとシルヴァス、シルフが呼び出された。

「クロノ！？」

フェイトはこの場にいるはずのない義兄がいることに驚く。

一方、クロノのことを知らないシルヴァスはキョトンとしている。

「誰だ？」

「バカ！クロノ・ハラオウンだよ！本局の魔導師の！」

シルフが説明すると、シルヴァスはある1点に気付く。

「ハラオウン……？ってことはフェイトの兄貴か！？」
「そうだ」

眉一つ動かさず、シルヴァスを睨むクロノ。

呼ばれた理由が理解出来たフェイトは慌てていた。

「えっと、クロノ。この人は」

「シルヴァス・アルビレオ。元航空隊所属で六課ウィンド分隊隊長、
だろ？」

「お、おう」

自分のことを知られており、シルヴァスは動揺する。

「お前のことは調べた。全部な」

クロノの挑発にシルヴァスの眉が動く。

クロノは立ち上がると、いきなりバリアジャケットを展開した。

「勝負しろ、シルヴァス・アルビレオ。貴様みたいな奴にフェイト
は任せられない」

「あちゃー、やっぱり」

「ええっ！？」

突然の挑戦にはやては頭を抱え、フェイトは慌てている。

「へっ、俺とやろうつてか？提督さんよお」

そして、挑戦を受けたシルヴァスは嬉々としていた。久々に強い相手と戦えて嬉しいのだろう。

場所を六課のトレーニングルームに移す。

シルヴァスは自信満々で準備体操をしている一方、クロノは静かに佇んでいる。

外ではギャラリーとして六課の面々が見ていた。

シルヴァスがいかに強くても、相手はあのクロノ・ハラウンである。

力量を知っているだけあり、なのははやて達はクロノの勝利で終わると思っていた。

「心配か？」

2人を見つめるフェイトの隣からシルフが話しかける。

「ま、階級はあっちが上だが実力差は……分かんねえな」

それでも、シルフはこの場では唯一シルヴァスが勝つと信じていた。いつも通り暴れて、ボロボロになりながらバカみたいな笑顔を浮かべているだろうと。

「2人共準備は？」

「問題ない」

「絶好調だぜ！」

はやてのアナウンスに2人共答える。

「じゃ、カウント開始！」

「オイ」

「何だ？」

1つ目の赤いランプが光る。

ふと、シルヴァスはクロノに尋ねた。

「テメーが俺の何を知ってるか、んなことはどうでもいい。けどな」

2つ目のランプが光る。

「他人の恋路を邪魔する奴は」

青いランプが光り、戦闘開始の合図が鳴る。

「馬に蹴られちまうぜ!!」

戦闘開始と同時にクロノに突っ込んでいくシルヴァス。

「蒼窮を駆ける白銀の翼、疾れ風の剣」

「Stinger ray」

クロノは迎え撃つように詠唱を唱えながら光弾を放つ。

「へっ！」

それをかわし、シルヴァスは一気にクロノの背後をとった。

「もらっ……!?!」

背後から斬りかかろうとした瞬間、シルヴァスはバインドに縛られてしまった。

「デイレイドバインド。設置型のバインドだ。気付かなかったのか？」

先程のクロノの詠唱はこのバインドのものだった。
クロノはシルヴァスの戦法が読めていたのだ。

「生憎、スピードタイプを相手にするのは初めてじゃないんだ」

今度は頭上に無数の魔力の刃を出現させる。

「……クククッ」

バインドで縛られたまま笑い出すシルヴァスに、クロノの表情が歪む。

「何が可笑しいんだ？負けを認めたか？」

「いや、違うぜ……こうでなきゃ面白くねえ!!」

シルヴァスは目を見開くと、自らを縛っていたバインドを勢いよく壊した。

「何っ!？」

クロノといえばバインドの達人。そう認知していたのは達も、あっさりクロノのバインドが破られたことに驚く。

「魔力量はバカみたいにあるからな、アイツは」

唯一驚きもせず、シルフが答えた。

「だが、遅い！」

クロノの魔法は完成しており、シルヴァス目掛けて一斉に放たれる。

「うおらあああああ！！！」

シルヴァスは一気に風を巻き起こすと、なんと逃げるところか、逆に無数の魔力刃に向かっていった。

そして魔力刃を避けると同時に、自身に当たる刃を双剣で弾き落としていた。

「バカな……」

強引すぎるやり方に、クロノも一瞬呆気にとられる。

全て打ち終わる頃には、多少掠ってはいるが命中はしていない状態のシルヴァスが未だ空を飛んでいた。

「さあ、続きをやろうぜ？」

息を切らしつつニヤリと笑うシルヴァスに、クロノの怒りが爆発した。

「やっぱり戦いは楽しいか？この殺人鬼が！」

殺人鬼。クロノの一言がシルヴァスの動きを止めた。

「え……？」

急な空気の変化にギャラリーもざわめき出す。

「シルヴァスが、殺人鬼……？」

フェイトも動揺を隠しきれない。ついさっきまで無邪気に笑っていた男が殺人鬼だと知らされ、俄かに信じがたかった。

「バカ！やめろ！」

「クロノ君！」

事情を知っているシルフとはやてがクロノに呼びかけるが、クロノは聞こうとしない。

「お前は約10年前、第50管理世界「グラーベ」での管理局と反乱組織との戦争に、囑託魔導師として参加していた」

クロノの声が響く。

約10年前といえば、PT事件や闇の書事件と同時期だ。

「そこで沢山の人間を躊躇なく斬り殺し、得た異名が」

「「銀風の鬼神」……」

それはフェイト達も聞いたことがあった。だが、それは誇張された活躍から来たものだと思い込んでいた。

「この異名は決して自称や誇張されたものじゃない。鬼神の様に殺す様を敵味方から恐れられて付けられたものだ」

現在のシルヴァスからは想像も出来ない経歴にギャラリーはすっかり言葉を失っていた。

「お前はその戦争、自分から志願して行ったらしいな」

「……ああ」

シルヴァスから出た肯定の言葉。それは周囲に凶暴なシルヴァスのイメージを植え付けるのに十分だった。

「戦闘が好きなのも、本当は何かを斬りたいからじゃないのか？そんな危険な男に妹を任せられると思うのか！？」

動きが止まったシルヴァスへ、クロノは自身の杖「デュランダル」で殴る。

「付き合う経緯も適当だったそうじゃないか！そんなの、認められるか……！」

バインドでシルヴァスを再び縛りつけ、怒りのままに殴る。

なのは達も知らされた事実に呆然とし、クロノを止めることを忘れてしまっていた。

「やめろ！それ以上刺激するな……！」

シルフが必死に叫ぶが、クロノには届かない。

「お前に……」

シルヴァスが漸く口を開く。
散々殴られ、口の中で溜まっていた血が吐き出される。

「口出す、権利があるのか……？」

「っ！」

「決めるのは、フェイトだ……俺が殺人鬼だろうと、フェイトが決めることだ……」

シルヴァスの眼はフェイトを捕えていた。

悲しそうな瞳に、フェイトは動揺していた。

果たして、本当にシルヴァスは殺人鬼なのか？それとも、今までのシルヴァスが真実なのか？

「黙れ！！」

再度、シルヴァスを痛めつけるクロノ。

「兄妹を心配するのは当然だろうが！お前は大人しくフェイトとの関係を切れ！」

激昂するクロノに、シルヴァスは力なく笑った。

「ああ……兄弟は大事だよなあ……けど、フェイトが諦めない限り、俺もやめる訳にはいかねえ……」

シルヴァスの細い声はフェイトに届いていた。

気楽にやろうと言った癖に、自身はボロボロになっても諦めない。
別れます、と言えば痛めつけられることもなかったのに。

「だから、お前に決められる筋合いは、ねえ……！」
「貴様っ!!」

聞き分けのないシルヴァスへ、クロノは最後の一撃を加えようとした。

クロノの攻撃は当たらなかった。

一瞬でバインドが壊される音がし、同時にシルヴァスの姿が消えていた。

「な、に……!？」

振りかぶった杖が空を切り、クロノは驚く。

ギャラリーも目で追えてなく、シルヴァスが消えたことに驚いていた。

クロノはキョロキョロと目を動かし、必死に消えた標的を探した。

上、いない。

横、いない。

その時、デュランダルに重みを感じた。

まさかと思い、杖の先を見る。

いた。

銀色の風を纏った双剣を構え、鋭い眼光はクロノを冷たく睨んでいた。

杖の先に立ち獲物を見据える姿は、まるで修羅。

その刹那、剣が振られた。

素早い攻撃にクロノは避けることすら許されず、弾き飛ばされる。

「くっ！」

体勢を立て直そうとするクロノにシルヴァスは追撃を加えた。

「ぐあっ!？」

速く、正確で無慈悲な斬撃はクロノの肉体を瞬く間に傷付ける。

「あれが、シルヴァス君……?」

普段とまるで違うシルヴァスの姿にギャラリーのはやて達も混乱していた。

「とうとうキレたか……」

「ど、どういうことです!？」

シルフが呟きに、リインが反応する。

「アイツはキレると昔の姿に戻るんだよ」

「昔って、戦争やってた頃か!？」

アギトの相槌に頷くシルフ。

現在のシルヴァスは鬼神と呼ばれていた頃の冷徹な性格だったのだ。

クロノを地面に叩き落とし、空から見下す。

いつものバカをしている面影はなく、据わった眼でクロノを睨む。

「標的を抹殺する」

冷たい言葉を放ち、シルヴァスは再度クロノに攻撃を仕掛ける。

「調子に乗るな！」

クロノはデュランダルを拾い、バインドで縛ろうとした。しかし、シルヴァスは華麗な動きでバインドを避けていく。

「まだまだ！」

バインドの1本が漸く足を捕らえる。

だが、バインドは一太刀で斬られ、また逃がしてしまう。

〔Tempest slash〕

ホワイトゲイルに纏った風が更に強く渦巻く。

シルヴァスは素早くクロノの眼前に降り立った。

攻撃が来る。クロノは咄嗟に防御魔法で防ごうとした。

「がはっ！？」

だが、シルヴァスは斬り裂く前にクロノの腹に蹴りを入れていた。不意の攻撃に気を削がれ、クロノは防御魔法を発動出来ず。

「テンペストスラッシュ」

無情な刃に斬り刻まれた。

「が、は……！？」

想像以上のダメージに倒れこむクロノ。

シルヴァスはデュランダルを蹴り飛ばすと、空いた右手を思い切り踏み付けた。

「ぐあああああ！？」

与えられた苦痛に叫ぶクロノ。

しかし、気にせずにシルヴァスは無表情で踏み続けた。

何度も、何度も。

「やめてシルヴァス！！」

そこへ、見ていられなくなったフェイトがシルヴァスを止めに入った。

後ろから体を抱き付かれ、シルヴァスの動きが止まる。

「シルヴァス君の勝ち、だね」

ショッキングな光景になのはが目を伏せながらシルヴァスの勝利宣言

言をした。

するとシルヴァスの武装が解除されて、双剣は指輪に戻った。

「……離せ、フェイト」

冷たい口調に、フェイトは思わずシルヴァスの体を離す。

「シルヴァス……」

「コイツのこと、観てやれ。それと……俺とは別れる」
「シルヴァス！」

顔を向けずに言い、シルヴァスはその場を去っていく。
フェイトはその後ろ姿を追うことが出来なかった。

「フェイト……」

涙をボロボロ流すフェイトに、黙っていられなくなったシルフが近寄る。

「聞いてくれないか？アイツのこと。それから判断してくれ」
「……………」

フェイトは泣き声を殺しながら、頷いた。

第9話 修羅（後書き）

次回予告

フェイト「シルフの口から語られる、シルヴァスの壮絶な過去」

シルフ「俺とアイツ、それぞれが犯した罪の話。口にしたくなかった鬼神の真実」

フェイト「彼の事実を知り、私は決断を下さなくてはならない……」

シルヴァス「次回、魔法戦記リリカルなのはWarriors 第10話 銀風の鬼神」

シルフ「俺さえいなければ、アイツは……！」

第10話 銀風の鬼神

クロノに明かされた、衝撃の真実。

鬼神と呼ばれた彼を目の当たりにして、私達は言葉を失った。けど、彼の悲しそうな表情も同時に知ってしまう。

彼の相棒が語る、本当の彼とは……。

魔法戦記リリカルなのはWarriors、はじまります。

（語り手：フェイト・T・ハラオウン）

魔法戦記リリカルなのはWarriors

第10話 銀風の鬼神

ボロボロになったクロノを医務室に運び終え、フェイト達は談話室で改めてシルフの話を聞くことになった。

因みに、シルフの話は医務室にいるシャルとクロノにも聞けるよう、通信が繋がっている。

「まず始めに、アイツと俺の出会いから話す」

苦い顔をしながら、シルフは語りだした。

ミッドチルダ北部の端、森の近くにシルヴァス・アルビレオは住んでいた。

父親と母親、そして弟のイアンと共に不自由なく幸せに暮らしていた。

それはシルヴァスが9歳の頃。

近くの森で遊んでいると、見知らぬ洞窟を発見した。

好奇心から中に入ると、そこには見たこともないような物があつた。

それは巨大な緑色のクリスタルだった。

よく見ると、中に小さな人のような何かがいる。

シルヴァスは恐れながらもクリスタルにそつと触つてみた。

すると巨大な環状魔法陣がいくつも現れ、クリスタルを覆った。

クリスタルは割れ、中にいたものがゆっくりとシルヴァスの手の上に降りてきた。

「ん……」

妖精のようなそれは目を覚まし、シルヴァスを見上げた。

緑色の短髪に、短パンと黄緑色の服。どうやら男のようだ。

こうして、シルヴァスはユニゾンデバイス、シルフと出会った。以来、シルヴァスはシルフと隠れて遊ぶようになった。

「兄さん、プリン持って何処行くのー？」

「外で食うんだ！お前の分もあるから来い！」

「僕は宿題あるから待っててー」

このことは親には秘密にしていた。
唯一、イアンには話すつもりだったが。

「いいか？俺の封印を解いたのはお前だ。だから俺のマスターはお前だ」

「んー、よく分かんねーや」

洞窟では、シルフがシルヴァスに自身のこと、ユニゾンデバイスのことを説明していた。

シルフはどうやら洞窟に封印されていたようだ。
何故封印されていたのか、だが、昔の過去等は永い眠りの間に忘れ去ってしまった。

その封印を解いたのは、偶然にも適合者であるシルヴァスだったのだ。

因みに、「シルフ」という名前はシルフが自分で付けたものである。

「魔力光も変換資質も同じ！お前以外に俺のマスターが勤まる奴がない！」

「どーでもいいけど、食わないならお前のプリンもらうぞ」

「あっ、デメー！」

シルヴァスがシルフのプリンを平らげると、突如轟音が鳴り響いた。

「な、何だ！？」

外へ出ると、家の方向から空へ黒く太い煙が上がっていた。
明らかに煙突からの煙ではない。

「父さん、母さん……イアン！」

「おいシルヴァス！」

シルヴァスは無我夢中で走った。

シルフも必死で後を追う。

煙が上がっている場所に辿り着くと、衝撃の光景が広がっていた。
家がなくなっていたのだ。

黒い破片が辺りに粉々に散り、木片からは異臭を放つ黒煙が上がる。

そして、近くには漆黒の鎧を着た男がいた。

どうやら、誰かと会話しているようだ。

「ここにはいなかったか……」

「恐らく別の場所か、持ち主と共に消えたか」

「フン、もういい」

男は木に隠れていたシルヴァスに気付いていないようだ。

刺がいくつも付いた巨大な剣を消し、男も転移魔法で何処かへいなくなった。

「そんな……っ！」

シルヴァスは自身の家の惨状、家族の死を目の当たりにし、思わず吐いてしまう。

「はぁ、はぁ……うあああああああ！！！」

少年の虚しい叫びだけがその場に響いた。

「これは推測だが、奴等は俺を狙っていたんだと思う」

シルフは自責の念で、目に涙を浮かべていた。

「俺の封印が解かれた時に発せられた魔力を辿って、アイツの家に……！」

歯を強く噛み締め、怒りのあまり膝を叩く。

「俺を見つけてなければ……俺さえいなければ、アイツの人生は狂わなかった！今だって家族と幸せに暮らしていたはずなんだ！鬼神なんて呼ばれず、悲しい思いをすることはなかったんだ！！」

それは、今までシルフがずっと抱えていた、シルヴァスへの罪の意識だった。

自分の存在が、シルヴァスを歪めてしまった。
だからこそ、せめて自身がシルヴァスを支えなければならない。
シルフが吐き出した思いを、フェイト達は黙って聞くしかなかった。

「……あの日以来、アイツは変わった」

ひたすら泣き続けるシルヴァスをシルフが洞窟へ移動させた。

「シルヴァス……」

心配そうに見つめていると、シルヴァスの顔が上がる。

「シルフ……お前を使うと、強くなれるよな？」

「あ、ああ……」

しかし、様子がおかしい。

シルフは狼狽えながらも答える。

「なら、俺はマスターになる。だから……」

シルヴァスはむくりと立ち上がる。

「俺に、復讐する力を……」

泣き顔は、憎悪に満ち溢れた表情と化し、怒りの籠もった視線でシルフを見ていた。

復讐者となったシルヴァスは、まず強くなることから始めた。時間を掛け、ベルカ式の魔法や風の魔力変換の使い方を学び、戦闘技術を鍛えた。

シルフが教えたのもあるが、殆どが独学だ。

結果、接近戦が得意なスピードタイプの戦士となった。

1年後。

シルヴァスは時空管理局の嘱託魔導師の試験を受けた。嘱託魔導師を選んだ理由は、訓練校に入るお金がなかったことと、早く局員として次元世界に出たかったからである。

「管理局での仕事なら、奴と出くわすチャンスがある」

そう考え、シルヴァスは迷わず試験を受けたのだった。
試験の結果は合格。

筆記はギリギリであったが、足りない得点を実技で補っていたのだ。

「アイツ、昔からバカだったんだよ」

シルフは苦笑する。

現在のシルヴァスと通ずる所があり、聞いていた一同も安心する。

「で、アイツの最初の任地が第50管理世界「グラীব」。ハラオウン提督の言ってた通り、戦争だよ」

シルヴァスはグラীবに向かう艦に無表情で乗っていた。

「大丈夫なのか？」

シルフだけが心配をするが、シルヴァスは答えない。

あの日からシルヴァスはすっかり無口になってしまった。

この任務はシルヴァスが自ら進んで受けたものだった。

一般的な事件を追うより、戦場の方がいろいろ学べると考えたのだ。
それに戦場に珍しいものがあれば、相手は狙うだろうと。

「戦争だぞ？人を殺すんだぞ？」

「……その程度で迷ったら、復讐なんて出来ないだろ」

漸く開いた口から出た冷たい言葉に、今度はシルフが黙ってしまった。

グラীবの土地は荒野で、見晴らしがいい。シルヴァスには打ってつけの戦場だった。

戦場に着くと、局員用の槍型アームドデバイスが支給される。

「……もう1本だ」

「へ？」

シルヴァスの発言に、局員が聞き返す。

「あー、もう1本って支給されませんか？コイツ二刀流なんで」

シルヴァスの代わりにシルフが訊ねた。

通常の魔導師はデバイスを1本だけで使うのだが、2本使う人物は見たことがない。

局員は首を傾げながら渋々もう1本をシルヴァスに渡した。続いて戦況を聞き、自分の班が戦闘を行う敵の情報を得た。

「行くぞ、シルフ」

すると、シルヴァスはすぐに前線に出ようとした。

シルフもやれやれ、といった感じで着いていく。

敵はたった一個小隊程度。シルヴァスはすぐにバリアジャケットを起動させ、飛行魔法で飛んで行ってしまった。

「ユニゾンイン！」

敵地へと飛びながらシルフをユニゾンさせる。

薄緑の髪に翡翠色の瞳となったシルヴァスは、風を巻き起こしながら敵の間を縫うように飛行した。

「な、何だ！？」

「敵だ！打て！打てーっ！」

猛スピードで飛んでくる緑の物体に驚きながら、敵と判断して討とうとする。

しかし、シルヴァスの動きは速すぎて敵の魔力弾は掠りもしない。

「標的確認。全て抹殺する」

それだけ呟くと、シルヴァスは敵部隊の真ん中に降り立つ。

そして、最初の2人を容易く斬り殺した。

「え？」

あまりの素早さに敵兵は理解出来ない内に体を刺し貫かれていた。シルヴァスは殺した相手を気にも留めず、次、また次と斬り裂いていく。

返り血を浴びた顔は表情一つ変えず、黙々と首や腹を斬り、胸を突き刺していった。

「き、貴様っ！」

兵士が杖を構えるも、先に槍を振るって風の斬撃波を放つ。

杖ごと斬り裂かれた兵は血を噴き出しながら倒れる。

こうして、シルヴァスは虐殺に近い形で初陣を飾ったのだった。

それから、たった数週間でシルヴァスの存在は広く知られるようになった。

風のように速く、正確に相手を討つ姿から「銀風の鬼神」の名が付

いていた。

「銀風！今日も大活躍だったな！」

「……………」

局員の1人がシルヴァスに話し掛ける。

だが、シルヴァスは無反応だった。代わりに、シルフが答える。

「ああ、ありがとな」

「相変わらず付き合い悪いな。それより、また壊したのか」

シルヴァスの強い魔力と強引な戦い方にデバイスの方が耐え切れず、よく壊していた。

「でも、今度専用デバイスを貰えるらしいぜ」

囑託とはいえ、シルヴァスが戦果を挙げているのは事実。加えてデバイスを壊す問題から、遂にシルヴァスに専用アームドデバイスが与えられるという話が出ていた。

「へえ、そりやすげえ」

「アイツのスタイルに近いよう、双剣型を注文したんだけどな。どんなのが来るのやら」

それから数日後、1つの小包が届いた。

中身は羽根を形取った飾りの付いた白い指輪だった。

「シルヴァス、お前のデバイスだ」

シルフの言う通り、管理局が用意したアームデバイスだった。名前はシルヴァスが付けるよう追記されていたが、シルヴァスのネーミングセンスのなさを知っていたシルフは黙っていた。

「「ホワイトゲイル」なんてどうだ？」
「……………」

シルフが勝手に付けた名前だが、シルヴァスはコクリと頷き、指輪を中指にはめた。
この双剣型デバイスにより、銀風の鬼神の名はますます恐れられることになる。

戦争も終わりに近付いた頃、シルヴァス達はある街に向かった。
理由は物資の現地調達と、敵地の偵察。

市場ではシルフ含む一部の局員は観光気分だったが、シルヴァスはやはり表情を変えずに調査をしていた。
いつ敵の襲撃を受けるかも分からない。シルヴァスの中で復讐心はどんどん大きくなり、いつの間にか敵全てに向けられていた。

「このっ！」

その時、シルヴァスへ石を投げられた。

シルヴァスは石を素手で掴み取り、飛んできた先を睨む。

石を投げたのは子供だった。

シルヴァスも約10歳程だったが、その子供は更に幼い。

「お前が父さんを殺したんだ！死んじゃえ！」
「何してんの！すみません！お願いですからこの子は殺さないで！」

その場にいた母親が子供を抑え、必死に謝る。

しかし、シルヴァスにとって子供の一言は深く突き刺さる物だった。

「……もういい。行け」

母親が子供を連れて去ると、シルヴァスはフラフラと自軍のキャン
プへ戻って行った。

「シルヴァス？」

日暮れ時。

夕飯の時間になっても出てこないシルヴァスを心配し、シルフが様
子を見に来る。

「どうした？」

シルヴァスは隅で怯えるように座り込んでいた。

「シルフ……」

あの事件以来、シルフはシルヴァスの弱った姿を見たことがなかつ
た。

シルヴァスは唯一信頼出来る相棒に、全てを話した。

子供に石を投げられた。

些細なことだが、子供は親を殺した自分を憎んでやった。

シルヴァスにはその姿が、自分と被って見えたのだ。

「俺がしてきたことは、あの男と同じだったのか？なら、俺は今ま

で何を……」

復讐だけを生きる意味にしてきたシルヴァスにとって、存在価値を崩される結果となったのだ。

「シルヴァス……」

シルフは言葉に詰まった。

シルヴァスの行為を肯定も否定も出来なかった。

「なあ、俺には何が残るんだろうな……復讐を終えたら、俺の血に塗れた手には何があるんだろうな……」

シルヴァスは虚ろな眼で自身の両手を眺める。

怒りに任せ、沢山の人間を殺してきた手。

復讐の連鎖に組み込まれた哀れな自分を殺したくなっていた。

「戦えよ！」

シルフが叫ぶ。

「戦いしか知らないなら、戦えよ！殺す為じゃない！もう、お前みたいな奴を生まない為に！」

「シルフ……」

シルフの叫びを聞き、シルヴァスの眼に光が戻る。

「お前は迷わず、動けばいいんだ。俺が支えてやるから！相棒だろ！」

そうだ。

いつも隣にはシルフがいた。自分にはまだ相棒がいた。シルヴァスの目は自然と涙が溢れていた。

「そう、だな……シルフ」

約2年間のグラীবでの戦争が終わりミッドに戻ると、シルヴァスとシルフは貯まっていた囑託の給料で正規の局員になる試験を受けた。

結果はやはりギリギリだが合格。

空戦魔導師として、もう二度と復讐者を生み出さない為、シルヴァスとシルフは再スタートを切ったのだった。

「これが俺とシルヴァスが辿った道だ。間違いだらけだけどな」

談話室を静寂が包んだ。

話し終えたシルフはフェイトをまっすぐに見つめる。

「ここからはお前が決めることだ。アイツを今まで通りのバカだと見るか、大量殺人をやった鬼神として見るか」

「……私は」

フェイトの決心は着いた。

シルヴァスは屋上で風を感じていた。すっかり日は暮れて暗くなっている。

「風邪引かない？」

シルヴァスの後ろから女性の声がした。

「知らないのか？バカは風邪引かねえよ」

シルヴァスが振り返ると、そこにはフェイトがいた。

「シルフから聞いたみたいだな」

「うん」

今まで何をしていたのか、シルヴァスにはある程度予測出来た。

「で、答えは？」

「決めた」

フェイトの真剣な表情を見て、シルヴァスは安心した。

「そうか……ま、人間何度か間違いはするさ。この関係は」

「別れないよ」

「取り返しがつくから……はあ？」

フェイトの答えに、シルヴァスは目を見開く。

「何でだよ。俺は殺人鬼だぞ！？戦うことしか知らない、危険な奴だ！付き合うメリットはねえだろ！」

「うん、メリットはない。でも、メリットだけで付き合う訳じゃないよ」

「俺とは……アレだ！お試しって奴だ！」

「じゃあ本物にする。それに決めろって言ったのシルヴァスだよ？」

シルヴァスが何を言っても、フェイトの決心は揺るがない。

「……俺の何がいいんだよ」

「逆に聞くけど、何でシルヴァスは諦めなかったの？」

シルヴァスは思わず視線を逸らす。

思っていたことと大分違っていたようだ。

「俺は……誰かに言われたからってお前を手放したくなかったただだ」

珍しく赤くなるシルヴァスに、フェイトは吹き出してしまう。

「ふふっ」

「な、何だよ！悪いかよ！」

「ううん、シルヴァスらしいなって」

「俺らしいって何だよ！」

フェイトは優しく微笑みながら言った。

「単純な所かな」

シルヴァスは殺人鬼でも復讐者でもない。

よくも悪くも単純で分かりやすい所に、フェイトは惹かれていたのだった。

シルヴァスはとうとう耳まで真っ赤にしてしまう。

「……っ！か、勝手にしろ！」

「うん、勝手にするね」

すっかり普段通りの空気が流れる。

星空の下、2人は手を繋ぎ中へ戻っていった。

翌日。

「よう、お前等！」

シルヴァスはいつも通りの様子で歩いていた。

「おはようございます、シルヴァスさん！」

話を聞いたソラト達も普段通りの対応をする。

全員が出した答えは、気にしないことだった。

過去なんて些細だと、今のシルヴァスを見て分かったのである。

「そつだ！エリオ、キャラ、今日から俺を「お父さん」って」

「絶対呼びませんよ」「」

速答されて、少し凹むシルヴァス。

「やっぱお前バカだわ」

「うるせえ！」

シルフのとどめの一言に噛み付くシルヴァス。

こんなやり取りをしながら、自分達を受け入れたフェイトや六課の皆に心の中で感謝するシルフだった。

第10話 銀風の鬼神（後書き）

次回予告

エドワード「突然六課にやってきた、聖王教会の騎士と名乗る男」

ソラト「けど、やることが破天荒でナンパばかり。本当に教会騎士の方なんでしょうか？」

エドワード「知らぬ内にディナーにまで誘われて……訳が分からないな」

ソラト&エドワード「次回、魔法戦記リリカルなのはWarriors 第11話 教会騎士」

ソラト「少し落ち着いてくださいっ！」

第11話 教会騎士

それは、静かな昼前に突然やってきた。

「見学？」

「そうですね。前々から六課に興味があつたみたいで……」

部隊長室にて、はやては聖王教会のシスター、シャツハ・ヌエラと通信をしていた。

内容はどうやら、教会騎士の1人が機動六課を見学したいとのことだ。

「迷惑でしたら引き止めますが」

「んゝ、別に構わんよゝ」

最近は特に目立った事件も起きていなく、見学ぐらいならと思ったはやては快く了承した。

「ありがとうございます。実は、既にそちらの近くに行つたみたいなんですよ」

シャツハの言葉にはやては飲んでいたお茶で噎せてしまった。

いくら了承したとはいえ、今すぐにこちらに来ると思っていなかった。

「すみません。悪い人間じゃないんですが、少々勝手な所があります」

「ま、まあ早い方がええ時もあるしな。ハハハ……」

苦笑いしながら、真面目なシャツハをフォローする。
その人物が六課を訪れたのは、この会話から僅か1時間後となる。

魔法戦記リリカルなのはWarriors

第11話 教会騎士

朝の訓練を終えたフォワード6人は、昼食を取る為六課の食堂へ足を運んでいた。

「もうお腹ぺこぺこだよ」

大食いであるスバルが笑いながら言う。

実際、スバルとエリオの食事は常人を超える。食費もバカにならないのだ。

「あはは……今日は僕が奢るよ」

「え、いいの！？ありがとー！」

彼氏であるソラトの心遣いに感極まり、スバルは人目を気にせず抱き付く。

「あー、はいはい。イチヤつくのは2人きりの時にしなさい」

2人のラブラブオーラを鬱陶しく思ったティアナが間に割って入る。誰かが止めなければ、この2人はずっとイチヤイチヤしていただろ

う。

「あれ？羽？」

食堂に着くと、エリオが何かに気付いた。
それは、床に落ちている白い羽だった。

「あ、誰かいますよ」

キャロの言う通り、明らかに六課のメンバーではない人物が食堂で
寛いでいた。

白い羽は、どうやらこの人物が舞わせていたようだ。

「あのー、どちら様でしょうか？」

食堂といえど、六課に部外者は入ってはいけない。
恐る恐るソラトが尋ねてみた。

「む、お前はここの者か」

リラックスした態度を崩さず、上から目線で反応した。

「は、はあ……六課の隊員ですけど」

「丁度いい。待っておったぞ」

「へ？」

男は急に立ち上がると優雅にソラトを指差した。

「さあ、早く部隊長室に案内せよ」

「……………」

全く事情が飲み込めないソラト達は啞然としてしまう。

「……む？どうした？早く案内を」

「いや、貴方は誰ですか！？」

話が全然噛み合わない。

優雅な態度を崩さない男に、ソラトはつい声を荒げてしまった。

「お前は八神二佐の使いの者ではないのか？」

「違います！」

どうやらソラトを自分を迎えに来た使いだと思い込んでいたらしい。

「そうか……まあ細かいことだ。それより案内を」

「そこまでだ」

頭を抱え出したソラトを引っ込めて、エドワードが交代する。

「おお、お前が使いか？」

「違う。それよりこちらの質問に答えてもらう。お前は誰だ？」

ペースに飲まれず、しっかりと質問を投げかける。

すると、男は目を見開いて驚いた。

「おお、自己紹介がまだであつたな」

やっと自分の素性を明かす気になったらしい。

何処までもマイペースな男に、ソラト達は既にグッタリしていた。

「私の名は、レクサス・インフィーノ。聖王教会騎士だ」

聖王教会。管理局の人間なら知らぬ者のいない程、密接な関係を持つ次元世界最大規模の宗教組織である。

その教会騎士が何故ここにいるのか。フォワード達は疑問に思った。

「八神隊長に用事ですか？」

「む。おお……なんと見目麗しい」

今度はスバルが尋ねる。すると、レクサスは後ろにいたスバル、テイアナに気付き、急に態度を変えてきた。

「お嬢さん方、よければ後でお茶など如何であろうか？丁度いいカフェを先程見つけたのだ」

「え、えつと……」

「いえ、その……」

スバルの質問を無視し、ナンパを始めた教会騎士。

突然の誘いに、スバルもテイアナも戸惑うばかりだ。

そして、この出来事に当然怒りを燃やす人物がいた。

「スバルから、離れてもらえますか？」

ソラトだ。

ソラトはレクサスとスバルの間に割って入り、笑顔で言い放った。しかし、どう見ても目が笑っていない上、右手にセラフィムを握っている。

これ以上刺激したらキレル、とエドワード達は思ったが、反してレ

クサスは意外な行動を取った。

「おお、お前の恋人であつたか。ならば大事にするがよい」

「え？あ、はあ……」

なんと、レクサスは大人しく引き下がった。

拍子抜けしてしまい、間抜けな反応をしてしまったソラト。

「ではそちらのお嬢さんは」

「結構です」

「ふむ、残念だ」

ティアナにもきつぱりと断られ、残念そうにするレクサス。
どうやら女性は好きだが、執着はしない性格のようだ。

結局、ソラト達がレクサスを案内することになった。

「八神部隊長、聖王教会からの客人を連れて来ました」

「入ってええよー」

ドアをノックすると、はやての声が聞こえたのでソラト達は入った。
中ではリインが3人分お茶を用意しており、はやては座って待っていた。

「おお、そなたが八神二佐か」

「はい。貴方のことはシスター・シャツハから聞いてます」

はやての対応から、ソラト達は本当にレクサスが教会騎士なのだと実感した。

「そなた等のことも、ヴェロツサや騎士カリムから聞いておる」

レクサスは優雅にソファアに座り、リインの淹れたお茶を嗜んだ。
暫くすると、ポカンとしていたソラト達に気付く。

「お前達、御苦労であつた。もう下がつてよいぞ」

「は、はあ……」

最後まで上から目線のレクサスに疲れ果て、フォワード達も何も言う気が起きなくなっていた。

「よお、聖王教会から客だつて？」

そこへ更にうるさい人物がやってきた。

シルヴァスの後にはシルフと、なのは、フェイトが続いた。

「いかにも」

優雅さを崩さず、対応するレクサス。

ロイヤルテイーを飲みながらシルヴァスとシルフを一瞥し、次になのはをフェイトを眺める。

「ふむ、そちらのお嬢さん達。後程、共にカフェにでも行かぬか？」
「えっ!？」

カップを置き、素早い動きでなのはとフェイトの手を取るレクサス。
急なナンパに先程のスバル達同様、驚くなのはとフェイト。

「オイ、人の彼女に何してんだコラ！」

それは、つい先日フェイトと結ばれたシルヴァスにとっては我慢できない出来事だった。

シルヴァスはレクサスの肩を叩き、フェイトから引き離す。

「私もちよっと……ごめんなさい」

対照的に、なのはは苦笑しながら断った。

「ほう、こちらにも既に相手が……六課の女性は恋人持ちが多いのだな」

残念そうに呟くレクサス。コイツは六課にナンパしに来たのか、とこの場にいた誰もが思った。

「ああ、そういえば」

ふと、レクサスは何かを思い出したかのように呟いた。

「ここにクラウンという男はおらぬか？」

クラウンとは、エドワードのファミリーネームだ。

突然呼ばれたエドワードは目を丸くする。

「俺だ」

「ほう、お前か。ラウム・ヴァンガードという男を知っているか？」

「ああ」

ラウム・ヴァンガード。陸戦魔導師であり、エドワードの数少ない友人だ。

正直に頷くと、レクサスは満足気に喜んだ。

「そうかそうか。ラウムは私の友人でな、ラウムの友は私の友でもある。エドワードよ、ありがたく思え」

「あ、ああ……」

随分一方的ではあるが、悪気はない様なのでエドワードはとりあえず受けておいた。

「おお、そうだ！友好の印に今日はディナーを開こう！エドワードよ、友人や恋人を連れて出席するがいい」

更に思い付きで喋るレクサスに、一同も何を言う気にもならない。

「いや、しかし俺達には仕事が」

「心配はいらぬよお前達の代わりに我が教会騎士が」

「レクサス！」

レクサスの話を遮ったのは、女性の声だった。

「シスター・シャツハ！？」

振り向くと、聖王教会シスター、シャツハ・ヌエラの姿があった。間違いなく、レクサスが心配で来たのだらう。

「おお、シスター。私に会いに来てくれたのか？」

「貴方がまた余計なことをしないか見に来たのです！」

レクサスの言葉をバツサリと斬るシャツハ。
身勝手な行動に、怒りが溜まっていたのだ。

「拳げ句、勝手に騎士団を使おうとするなんて！もう少し自重なさい！」

「いやしかし」

「言い訳はなしです！」

シャツハのお説教は遂にレクサスを黙らせることに成功した。

「毎日あんなの相手にするなんて、苦労してるな」

「お前が言っな！」

「まあまあ、落ち着くです！」

シルヴァスの一言に、シルフが拳をワナワナと震わせるが、リインに押さえられる。

「では、お騒がせしました」

「エドワードよ、ディナーには出席するのだぞ！」

ズリズリとシャツハに引き摺られ、レクサスは退場していった。

「……参加するの？」

「する訳ない」

ソラトの問い掛けに、エドワードはキツパリと答える。

当然、外出許可は降りないだろうし、何より面倒だった。

しかし、夜になると再びレクサスは騒動を巻き起こすことになった。

「これは……」

教導を終え、寮に戻るエドワード達が目撃したのは長いリムジンだった。

「おお、待つておったぞ」

後部座席からは、レクサスが紅茶を飲みながら顔を覗かせる。どうやら、エドワードを迎えに来たようだ。

まさか本当に来るとは。

エドワードは言葉を失った。

「安心しろ。はやて二佐には話を付けてある。ウィンド分隊のフォワード2名、私の家へ招待すると」

いつの間に。おまけに、同分隊であるソラトの許可まで取っている。謎の手際のよさに、フォワード陣はもう苦笑するしかなかった。

渋々乗り込むエドワードとソラト。

「いつてらっしゃい」

スバルが手を振って見送るが、ソラトは内心スバルも一緒に連れていきたかった。

「すまないが、時間が時間だ。エドワードの恋人を誘うことは出来ないようだ」

「あ、ああ……」

寛ぎながら謝罪するレクサスに、エドワードは頷く。

だが本心では、レクサスの考えていることが分からずに困惑していた。

「ラウムも仕事で来れないようだ。全く残念だ……」

オーバーなりアクションで残念がるレクサス。
どうやら、本当にラウムも誘ったようだ。

「お前は何を考えている？俺は本当にお前の友人だと？」

つい、エドワードは本当に聞きたかったことを尋ねてしまう。

「勿論。我が友に信じられぬ者などありはしない。友の友でも、同じことだ」

レクサスはエドワードを真っ直ぐ見つめ、自信満々に答えた。
純粹かつ率直な答えに、エドワードは何も言い返せなかった。

レクサスの家は想像以上の豪邸だった。

純白の壁の中は、煌びやかな装飾の廊下が並ぶ。

「我がインフィーノ家は代々続く由緒正しき家柄。驚く必要はない」

レクサスが王子のような振る舞いの性格に育った理由が分かる気がするエドワード達だった。

レクサスの案内で廊下を通り、広間へ向かう。

その途中、ソラトはインフィーノについて思い出していた。

インフィーノ・コンツェルン。

ミッドチルダでも有数の財閥の1つで、主に聖王教会に出資している会社である。

まさか、教会騎士にインフィーノの後継者がいたとはソラトも思わなかった。

「さあ、座りたまえ」

長い机には、赤ん坊を抱えた若々しい女性が既に着席していた。

「諸君等に紹介しよう。我が母君、アルテツツア・インフィーノ」
「こんばんは」

ソラトとエドワードは目を見開いて驚いた。

アルテツツアはレクサスの母親には到底見えない若さだったからだ。

「そして、我が弟君のサイオン・インフィーノ」

次にレクサスが差したのは、アルテツツアに抱えられた赤ん坊だった。

生えかけの白い髪が、生まれたばかりであることを物語っている。

「サイオンは我がインフィーノ家の次期当主になる男だ。礼節を持つて」

「ちよつと待て。次期当主？お前じゃないのか？」

レクサスの言葉をエドワードが遮る。

確かに、長男のはずのレクサスが継ぐのが道理だ。インフィーノのような大きな財閥なら尚更である。

「私にはそのつもりはない。私は聖王教会を、そして家族を守る騎士だからな。我が家族を守護し、弟を導く兄となるのが私の役目だ」
気品を漂わせながら、レクサスは迷いなく言った。

することは破天荒でトラブルメーカーだが、高貴で独自のプライドと意志を持った人物。
そんなレクサスに、ソラトとエドワードは不思議と悪い印象を持たなくなっていた。

「でも、本当は教会のシスターさんに興味が」
「母上！余計な話は謹んでくれませぬか！」

やはりナンパ好きだったようだ。
悪印象はなくなったが、変な奴である認識は消えそうもない。

やがて、料理が運ばれてきた。

「わぁ……」

次々と並べられる品目に、ソラトは感嘆の声を漏らした。
もしスバルがいたら、感動のあまり泣いてしまつかも、と考えながら。

「さぁ、頂きましょう」

アルテツツアはサイオンを執事に預け、スープに口を付けようとした。

「母上、まずは味見を」
「あつ」

ところが、レクサスがスプーンを奪い取り、そのまま飲んでしまった。

「ふむ、美味だ……」

スープを味わうレクサス。

次の瞬間、レクサスは顔を真っ青にして倒れてしまった。

「レクサス！」

アルテツツアが駆け寄るが、レクサスはピクピクと身震いするのみ。

「アルテツツアさん！近寄らないで！毒です！」

ソラトがレクサスから引き離し、エドワードが毒入りのスープを遠ざける。

「ソラト、局と病院に報告を」
「うん！」

周囲を見回すエドワード。
すぐに何かがないことに気が付いた。

「……サイオンがない」

レクサスの弟を抱えた執事が、その場から消えていた。

「わ、が……兄弟……」

口から泡を吹きながら、レクススは必死に腕を伸ばしていた。

第11話 教会騎士（後書き）

次回予告

エドワード「毒に倒れたレクサスは誘拐された弟を探そうとするが、体は次第に弱っていく」

ソラト「誘拐犯の狙いは、やっぱりお金。しかも裏では意外な相手との繋がりがあった」

エドワード「友人と呼ばれた以上、放っておく訳にもいかないな」

ソラト&エドワード「次回、魔法戦記リリカルなのはWarrior S 第12話 降臨、誇りと家族愛」

レクサス「私に刃を向けたことを悔いるがいい！」

第12話 降臨、誇りと家族愛

それは、嵐のような1日だった。

突然現れた教会騎士の破天荒な行動に、俺達は振り回されていく。

やがて知った、騎士の誇りと意志。

純粋な家族を襲う悲劇を俺は止められなかった。

魔法戦記リリカルなのはWarriors、はじまります。

（語り手：エドワード・クラウン）

魔法戦記リリカルなのはWarriors

第12話 降臨、誇りと家族愛

聖王医療院。

毒のスープを飲んでしまったレクサスが運ばれて1時間。漸く落ちていたらしい。

「毒は抜けましたが、体力が戻るには時間がかかるでしょう」
「ありがとうございます」

アルテツアに経過を告げ、医者は退室した。

「貴方達もありがとう。レクサスを助けてくれて」

アルテツツアはソラトとエドワードに礼を言う。

しかし、2人の表情は暗かった。

レクサスの弟、サイオンの行方がまだ掴めてないからだ。

「あの執事を現在地上部隊が捜しているが……」

「すみません。僕等が近くに居ながら」

「いいえ、貴方達の所為じゃないわ」

自分を責めるソラト達に優しい言葉を掛けるアルテツツア。

家柄上、命を狙われることも多く慣れてしまっている為、取り乱さず落ち着いている。

すると、アルテツツアへあるメッセージが届けられた。

「開いてください」

エドワードの指示に従い、メッセージを開く。

それはサイオンを誘拐した執事からだった。

「ガキを返してほしければ、現金で1億用意しろ。引き渡し場所は添付したが、管理局に話せばガキの命はない」

メッセージは身代金の要求だった。

予想通りだ、とソラトは顔を歪ませるが、エドワードには引っ掛かる箇所があった。

『1億……巨大な財閥への要求としては少ないんじゃないか?』

「我が兄弟を……」

その時、ベッドの方から声がした。

レクサスが目を覚まし、身を起こしていた。

「レクサス！まだ寝ていないと！」

弟を探しに行こうとするレクサスをアルテツァが押さえる。

まだ体力が戻っておらず、レクサスは苦しそうにフラフラしていた。

「弟を救うのは、兄の役目……」

レクサスは母の手を払い、ゆっくり歩き出す。

しかし、エドワードの肩に手を置くように倒れこんでしまう。

「兄の役目、か……」

エドワードはレクサスに肩を貸し、再びベッドへ寝かした。

「お前はまだ寝ている。次に目を覚ます時には必ず弟を助け出す」

そう言い放ち、エドワードは病室を出て行く。

残されたソラトもアルテツァを連れてその後を追った。

六課に戻ると、2人ははやて達に報告を済ませた。

「身代金の要求か……」

はやては頭を抱えていた。

「あの、身代金なら払えない金額ではないので……」
「ダメや」

アルテツアは素直に身代金を持っていくことを提案するが、はやてにあっさり却下される。

「払えない金額じゃないことが問題なんです」
「え？」

加えてフェイトが補足説明をする。

「最初、執事は貴方へ毒入りスープを飲ませようと思いました。しかし、騎士レクススが代わりに飲んでしまった」

「ええ……」
「そして、払える程度の身代金の要求。恐らく犯人の目的は、貴方の殺害です」

フェイトの推測に、予想出来なかった者達はショックを受ける。

「何でだ？そんなに恨みを買うような人間にも見えなイデデ！？」
「お前は引っ込んでろ」

納得出来ず、抗議するシルヴァスを、シルフが耳を引っ張って黙らせた。

「狙いは赤ん坊やね」

はやてが代わりに、執事の目的を答える。

インフィーノ家の跡取りとして認められているサイオンだが、今は

まだ赤ん坊。

邪魔な両親を殺し、サイオンを手の内に出来ればインフィーノ・コンツェルンの富と権力を独り占め出来ると思ったのだろう。

「ですので、身代金は持つて行かない方がいいと思います」

「……はい」

はやてとフェイトの話をアルテツツアは信じるしかなかった。

ベル力領から離れた廃工場。

赤ん坊を寝かせた執事が、誰かと通信回線を開いていた。
相手は白衣を着ており、科学者のような風貌をしている。

「首尾は順調のようだね」

「ああ。アンタがくれた力も、出番がないかもしれないな」

そう言いながら、執事はポケットから注射器を取り出す。
注射器には紫色の怪しい液体が入っていた。

「だといいいけどね」

「それでも、約束は守ってやる。インフィーノを掌握した時に、研究資金を出すというな」

執事の話聞き、通信相手の男はニヤツと笑った。

最初から執事は計画を立てて、犯行に及んでいた。
その際の協力者として目の前の男に依頼していたのだ。
レクサスが飲んだ毒も男が用意した物だ。

執事は注射器を再びポケットにしまい、通信を切った。

「人間の欲ってというのは醜く、操りやすい。ま、精々頑張ってくれたまえ。ウヒヤヒヤッ！」

通信先の白衣の男——マルバス・マルネロは不気味に笑いながら執事を監視していた。

作戦会議が終わり、エドワードは一先ずアルテツアを家に送り届けた。

その帰り道、エドワードは自身の車を運転しながら、恋人であるギンガと話していた。

「そう……今日1日、大変だったわね」

「全くだ」

モニターの向こうで苦笑するギンガ。

珍しく顔をしかめるエドワードだが、ギンガとゆっくり会話している間こそ、リラックス出来る大切な時間だ。

「……けど、奴にも守るべきものがある。命を賭けてもいい程、大事な兄弟がな」

エドワードはチラッと助手席で眠るソラトを見る。

可愛い弟分のいるエドワードには、レクサスの覚悟がしっかりと伝わっていたのだ。

「病院を抜け出そうとする無茶なところも、エドと同じね」

「お、おい……」

ギンガにからかわれてしまうエドワード。

JS事件では、エドワードが怪我を無視してまでギンガを助け出そうとし、重傷を負ったことがあるのだ。

「奴に無理はさせない。代わりに俺が助け出す」

同じ兄として、友達として。

エドワードの闘志は燃えていた。

「頑張るのもいいけど、ディナーなら誘ってくれてもよかったんじゃない？」

「いや、それは忙しいと思ったからであって……」

「じゃあ、今度は2人だけで行きましょ。ね？」

「……考えておく」

最近は通信会話だけで、お互い物足りなさを感じていた。

デートの約束もし、エドワードはアクセルを踏む足を強くしたのだった。

翌日、時刻は9時。

指定された廃工場にアルテツァが現れた。

手に持っているアタッシュケースには、身代金が詰まっている。

入口付近ではソラト達が待機していた。

敵は何処に隠れているか分からない。ソラトは工場内を集中して見回した。

「持って来たわ。だからサイオンを返して！」

工場の中央まで来て、アルテツツアが叫んだ。
しかし、工場には人1人見えない。

場所はあっているはずだ。アルテツツアは首を傾げる。

「ケースを地面に置け」

すると、何処から声が聞こえてきた。

執事のもつたと分かれると、アルテツツアは更に叫ぶ。

「サイオンは無事なの！？姿を見せて！」

「ケースを置くのが先だ」

アルテツツアの要求を執事は無視する。

渋々、アルテツツアは指示に従いアタッシュケースを床に置いた。

「これでいいでしょ！？サイオンを」

ズドン！

アルテツツアの叫びは、銃声でかき消された。

物陰から放たれた銃弾は彼女の左胸を貫いていた。

「これで財閥は俺の……？」

勝利を確信した執事だったが、すぐに異変に気付いた。
胸を撃たれたはずのアルテツツアが血飛沫すら吹かず、アタッシュ
ケースと共に消えた。

それだけか、なんと何人にも増えてその場に現れたのだ。

「残念だったわね」

「!?!」

撃たれてショックを受けていた表情から一転、不敵な笑みで執事を見る。

そして、貴婦人達の姿は橙色のツインテールの少女の姿へと変化した。

「成功ね」

工場の外ではティアナが作戦の成功を確信していた。

フェイク・シルエット。ティアナの得意な高位幻術魔法で、他人の幻影を出現させることも可能。

因みに本物のアルテツァは護衛付きで家にいる。

「くっ!」

執事は再度引き金を引こうとするが、それより先に銃を撃ち落とされてしまう。

「諦める」

外からブレイブアサルトを構えたエドワードが入ってくる。

同時に入口からソラト達もやってきた。

「時空管理局です!誘拐、殺人未遂の容疑で貴方を逮捕します!」

優秀なフォワード達に追い詰められ、執事の顔色にもいよいよ焦りが浮かぶ。

「まだだ……こんなところで終われるか！」

執事は胸ポケットから注射器を取り出すと、注射針を自身の腕に刺して液体を注入した。

「無駄な抵抗はよせ！」

エドワードが注射器を狙撃するも、既に執事の体に謎の液体は入ってしまった。

「ククク……管理局の狗共め、捕まえられるものなら捕まえてみる！」

執事の体が徐々に変化していく。

人間らしい肌は殻のようなものに覆われ、右手が強固な鋏へと変異していった。

背中からは長い針のような尻尾が付き出し、体も執事服を破り異常な姿へと変わった。

その姿は、まるでサソリを彷彿させる獣人。

「獣人化させる薬物、だと……？」

「まさかマラネロと繋がりが！？」

突然の変異にソラト達は驚きを隠せない。

サソリ獣人となった執事は鋏を振りかざし、襲いかかってきた。

「ふむ、実験は成功だね」

一部始終のやり取りを監視していたマラネロが呟く。
彼にとって、執事は獣人化薬の実験台にすぎなかった。

成功すれば研究費用が増え、例え失敗しても自身を突きとめられる程の関係ではないため簡単に切り捨てられる。

自身へは損のない取引にマラネロは満足していた。

「ガアアアアアアア！」

獣人は涎を垂らしながら、ソラトを襲う。

尻尾から滲み出る毒液は、周囲の木箱を数滴で溶かしていく程強力だ。

「エド兄！ティア！」

「ああ！」

「任せて！」

鉄をセラフィムで抑えながらのソラトの合図で、エドワードとティアナは背後から集中砲火を浴びせた。

「グガアアアアア！？キ、キサマラアアア！」

痛みに苦しみながら、獣人は2人を睨む。

殻はそこまで硬くはないようだ。おまけに、理性を失いつつある。

「来るぞ！」

「魔口弾！」

エドワードの読み通り、獣人は口から圧縮された魔力の塊を放つ。

2人は避けるが、ティアナは足を尻尾で掴まれてしまう。

「ティア！？このおおおお！」

「魔口弾・乱針！」

スバルが尻尾を破壊しに向かうが、獣人は今度は魔力の針を連射する。

回避された針が刺さった床が溶けていくのを見ると、尻尾の針と同じ毒を含んでいるようだ。

「くっ！」

エドワードも尻尾に狙いを定めるが、鋏を抑えていたソラトを投げ飛ばされ、共に吹き飛ばされてしまう。

「マズハコノコムスメカラダ！」

理性は失っているが、フェイク・シルエットで惑わされたことは覚えていた。

獣人は尻尾の針先をティアナの首筋に当てようとした。

その瞬間、何処から白い羽根が飛んで来て、獣人の尻尾を切断した。

「グオッ！？」

「げほっげほっ……え？」

解放されたティアナは獣人から距離を取り、羽根が飛来した方向を見た。

「皆、ご苦労だった。後は私に任せるがよい」

そこには、入院しているはずのレクサスが優雅に立っていた。
飛来した羽根はレクサスの手に収まる。

「何故お前が……？」

エドワードが尋ねるが、レクサスは落ち着いて話す。

「これはインフィーノの問題。私が片付けるべきことだ……ぐっ！
」

まだ体力が万全ではない様で倒れそうになるが、優雅な立ち振る舞いを崩さないレクサス。

「グレースパワード、セットアップ」

「Yes, sir, ready?」

「レクサスウ……シネエエエ！」

獣人が魔口弾を放つが、レクサスの手にあつた羽根から白い帯状魔法陣が現れ、レクサスの周囲を守るように包む。

やがてドーム状になった魔法陣が翼を開くように消え、周囲に無数の魔力で出来た白い羽が舞い落ちる。

「降臨、満を持して」

そして、腰に2本のブーメランを携えたレクサスがその場にいた。

「グガアアアアア！！」

獣人が鉄を向けて襲いかかるが、レクサスは少ない動きでかわし、逆にカウンターを獣人の体に叩きこむ。
おまけに殴った手を拭う余裕まで見せる。

「グッ……アアアアアア！」

コケにされていると分かった獣人は怒り、魔口弾を放とうとする。
しかし、うまく魔力が練れず放てなかった。

「これ……まさかAMF!?」

いつの間にかレクサスが張っていた魔法にスバルが驚く。

AMFといえばガジェットに搭載されている物だが、本来は高位の
フィールド系魔法。

それをレクサスは独自に習得していたのだ。

「ああ、ハツタリにしかならんがな」

濃度が通常のガジェット以下にしかならず、ほぼハツタリにしか使
えないらしい。

しかし、至近距離にいる獣人に使うには十分のようだ。

「私に刃を向けたことを悔いるがいい！」

「Noble slicer」

成す術のなくなった獣人へ、レクサスは白く光るブーメランを投げ
つける。

2本のブーメランはまるで生きているかのように獣人を斬り刻み、

最後にレクサスの手に戻って行く。

レクサスがグレースパワードを手にすると同時に、元執事だった獣人は爆散したのだった。サイオンはエリオとキャロが救出しており、無事だった。

「だー、だー」

「何も心配はいらぬ、我が兄弟よ」

何があつたか理解していない無垢な笑顔でレクサスを求める。

レクサスはバリアジャケットを解除し、珍しく優しくそんな笑みで弟を抱き抱えた。

「皆の者、ご苦勞であつた。感謝する」

偉そうではあるが、感謝の意を示したレクサスに苦笑するフローード達。

しかし、エドワードには気になることがある。

執事に獣人化薬を渡したのがマラネロだとしたら、敵は1からでなくとも獣人を生み出す技術を持ち合わせていることになる。

『一体何処まで技術を持ち合わせているんだ……？』

「そうだ！礼を兼ねてパーティーを開こう！皆、我が家に招待……」

おお、頭がクラクラするぞ」

「いいから早く病院に行ってください！」

そんなエドワードの気掛かりを余所に、またもや勝手に騒ぐレクサス。

こうして、変な知り合いの奇行に再び手を焼かされることになるフ

オワード達だった。

第12話 降臨、誇りと家族愛（後書き）

次回予告

ソラト「戦い続きの中に訪れた平和。やっとスバルとデートが出来る！」

エドワード「僅かな時間を使い、隔離施設の元ナンバーズの様子を見に行く。……ギンガにも会いたいしな」

スバル「けど、デートを楽しむ私達の前に謎の人物が……ええっ！？」

スバル「次回、魔法戦記リリカルなのはWarriors 第13話 謎の来訪者」

ソラト「それは、厳しい戦いの始まり」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4376y/>

魔法戦記リリカルなのはWarriorS

2012年1月13日15時46分発行